第七章　観　光

第一節　虚空蔵信仰と観光

一、福満虚空蔵の縁起と信仰

(一) 柳津福満虚空蔵と円蔵寺の縁起

わが柳津町の観光メッカである福満虚空蔵菩薩及び円蔵寺縁起とは多分に伝説的なものである。しかし古来より幾多の名士の崇敬と大衆の十三講詣りなどに象徴される虚空蔵信仰とは、親しみのなかにも生々と受けつがれてきてその足跡は大きい。以下『楊津秘録』、『虚空蔵縁起』(昭和三十八年円蔵寺発行)、『福満虚空蔵縁起絵巻』(天正十五年桜本坊長栄筆、雪洞画)などによってその縁起と信仰観光の足あとを記してみる。

福満虚空蔵菩薩は日本三大虚空蔵の一つである。これをまつるところの霊厳山円蔵寺は東北有数の巨刹(きょさつ)であり臨済宗妙心寺派に属し人皇五十一代平城天皇の御宇大同二年丁亥に法相宗の僧徳一大師が七日間護摩を修し、ついに明星白龍に御して壇上に臨むという奇端を感得されたので、此の柳津の地に仏寺を創立したものといわれている。

これよりさきに、人皇五十代桓武天皇の延暦二十三年(八〇四)に僧、空海(弘法大師)が三十一歳にて唐の国に入り、青龍寺慧果阿闍梨に謁して金胎両部の秘密と三鈷(さんこ)、霊木愛樹とを授けられたといわれるが、大師は同二十四年に帰朝して紀伊国に高野山金剛峯寺を建立して新しい仏教の一派である真言宗を拡められたのである。この真言宗は秘密を主として大日経、金剛頂経等をもととするもので一般に密教ともいい、例えば真言密(真密)などと表される。

さて、大師はこの帰朝のさいに三鈷と愛樹を海に投ぜられて「その止まるところ即ち有縁の霊地なるべし」と祈誓されたが、不思議にも三鈷は紀伊国牟婁郡南の松に懸っておられたので、この霊地に仏寺を建立されたのが前述の高野山金剛峯寺とされている。なお愛樹は紀州熊の浦(那智の浦)に漂い、さらに安房国天野浦に漂着したが、大師は帰朝後にこの霊木にあわれ、これを元・中・末木に三断されて仏地有縁の地を求められんとして海に投ぜられた。かくして元木は同国清澄に漂い至ったので、この地に能満虚空蔵を刻まれ中木は常陸国村松に着いて大満虚空蔵を刻まれたといわれる。これらがわが柳津の福満虚空蔵とともに同木同作の日本三虚空蔵といわれる由縁の虚空蔵尊である。

さて、末木は流れ流れて越後国に達した。この時いづこともなく雌雄の白蛇が現われてその末木をば頭に乗せ、越の海より会津嶺(ね)の

の川（会津川・阿賀川・只見川）を遡って三本柳の津、すなわちわが柳津の南岩坂の淀に運び終えると、その雌雄の白蛇はいづこともなく姿を消し去り、その末木のみが七日間渦き漂っていたという。この木が渦きしていたために木が巻くところから、木巻、後に転じて小巻の称が生じたともいわれる。

おりしも土地の漁翁がこれを拾い取り、斧をもってまさにこの木を伐らんとすると、忽ちにその木光を放ち、加えていと妙なる音を発したという。漁翁は余りのことに驚いてその木を割ることを止めて、何か霊告のあろうことかと思い家に帰った。

果せるかな、その夜夢の中に一人の白髪の老人が現われていうのには、「これは天竺の愛樹である。尋ね来る人（弘法大師）あればその人に捧ぐべし、夢々疑うことなかれ」と告げて姿を消した。漁翁は夢さめてこの霊木の由緒ありげなるを知ってこれを大切に祀っておいたといわれる。

一方、このころ会津川川上十三里、長江荘沖邑（現只見）まで愛樹のゆくえをさがされていた大師はめざす愛樹を求めることができずに空しく柳津まで引き返されたところが、この漁翁のもとでその霊木とあわれたのである。只見川の名のおこりは大師が会津川を空しく只見てこられたというので南岩坂（柳津）より上流を只見川とされたといわれる。また柳津より下流は霊木が揚ってきたので揚ケ川といわれるようになったが、後世阿賀川となったのであるといわれる。この漁翁が坂上家の先祖である。

大師は漁翁の話を聞かれ、霊木を手にされて非常に喜ばれたといい、直ちに斎戒沐浴一刀三礼されてその霊木にて虚空蔵菩薩の尊像を刻まれ、この柳津の地に祀られたといわれる。これが日本三所の随一たる福満虚空蔵大菩薩の御本体であり、その霊験の顕著なこと他に比べようがないといわれている。

なお、菩薩の尊像を刻まれたさいにでた木屑を只見川に捨てられたところ、あら不思議、木屑変じて魚と化し、その魚群が悠々と泳ぎ回ったという。これ即ち現在の魚渕のうぐいといわれ、来柳の人々の目を楽しませる一光景となっている。これは昭和十五年（一九四〇）七月十二日に天然記念物と指定され、虚空蔵菩薩の使いとして古くより殺生漁獲を禁じられ、それを取ったものは直ちに仏罪を受けるといわれる。いつのころかある男がこの魚がこの魚渕のうぐいに目をつけ、深夜このうぐいの群を投網にかけて大量に漁獲し喜び勇んで家に立ち帰り、きょうの漁はすごいぞと自慢しながらのぞいてみたら、こはいかに魚はすべてかんなくずや木片に変じていたという。悪心を持った漁夫はつくづく考えてみるうちに、「これはわが悪心を虚空蔵菩薩がいかられて木のくずとなされたのであろう。ああ自分は悪いことをした」とわが行いを反省し、ただちに魚渕にとって返してこの木片を投じたところ、不思議や木片は元の魚にたちもどり、うろこのひらめきも美しく群をなして泳ぎまわったという。漁夫は改めて虚空蔵菩薩の功徳をさとり、この後虚空蔵菩薩を深く信仰するようになったと伝えられている。

また、慶長十六年五月十四日に時の会津領主たる蒲生秀行が出倉より毒もみをしたために、只見川の魚が数万尾も浮きあがってしまったが、不思議や魚渕のうぐいは一尾も死ななかったともいわれる（一説には柳津の村人がこれを守ったともいう）。人々は秀行の非行に驚き、他日必ずたたりがあろうとうわさしたが、果せるかな、翌年になって同月同日秀行は苦しみのなかに命が絶えたといわれ、人々はまさしく虚空蔵菩薩のいかりなりと口々に言い合って、さらに菩薩の信仰を深めたといわれている。

さて、本尊福満虚空蔵菩薩像は御丈一尺八寸にて弘法大師作、脇立不動明王及び毘沙門天像は御丈一尺八寸にて慈覚大師の作、また賓頭盧尊者像は御丈一尺四寸にして弘法大師が虚空蔵菩薩像を刻まれた際にその余木を以て刻まれたといい、大黒天像は御丈四寸にして、弘法大師が始めて刻み給うたものとされている。これが円蔵寺に遣わされ、後代に至って徳川三代将軍家光公がかつてこの大黒天像を拝請され、四代将軍家綱公の世に至って返納されたと伝えている。

(二)　虚空蔵菩薩とは

虚空蔵菩薩とはどのようなほとけ様でいらっしゃるのか、まず『仏教語大辞典』によると、

「虚空のように無限の慈悲を現わす菩薩。福と智の二蔵の無量なことが、大空にも等しく広大無辺であるのでかく称する。胎蔵界虚空蔵院の中尊で蓮華座に座して五智宝冠をいただき、右手に智慧の宝剣、左手に福徳の蓮華と如意宝珠を持つ。……求聞持法を修する本尊や五大虚空蔵菩薩もある。日本では古くから信仰された」

とある。また、図説『梵字』によると、

虚空蔵菩薩　梵名　アーカーシャガルバ

阿迦舎蘖婆といって訳して虚空蔵、密部にては如意金剛・庫蔵金剛・富貴金剛の別名もある。

天長六年（八二九）道昌僧正が法輪寺の本堂に参篭して、百日間虚空蔵求聞持法（記憶力を得る行法）を修するや、満願の日に虚空蔵の尊影が出現、十七日間消え去らなかった奇端をもって早速尊像を彫り、弘法大師を講じて開眼供養した伝説があります。

金剛界曼荼羅では、金剛宝菩薩

胎蔵界曼荼羅では、虚空蔵院の主尊

釈迦院では、釈迦如来の脇待

又、五大虚空蔵菩薩といって

中央　法界虚空蔵（解説虚空蔵）

東　金剛虚空蔵（福徳虚空蔵）

南　宝光虚空蔵（能満虚空蔵）

西　蓮華虚空蔵（施願虚空蔵）

北　業用虚空蔵（無垢虚空蔵）

虚空蔵菩薩・梵文真言意訳（別説）

敬礼（オン）（即帰命）金剛（バザラ）　宝（アラタンノー）（菩薩）に

絶対帰命　虚空蔵菩薩（種子）成就

唵　金剛宝（菩薩）よ　唵　宝珠よ、成就。

と説明されている。これらによっても虚空蔵菩薩が福と智の二徳を授けられる広大無辺の慈悲を持たれるものであって古くより密教をとおして日本にも信仰されたことがわかる。

虚空への信仰は星宿・日月の信仰とも関係を持ち、大日如来とも関係を有している。柳津の福満虚空蔵にも仁王門岩崖の下方に大日如来を祀り、六月八日には大日さまと称してお祀りがみられたが、虚空蔵菩薩の性格は智を表わす多分に理性的な面をもっておられることになる。虚空蔵菩薩信仰は古く真言宗・天台宗の日本布教以前の奈良時代において知恵のほとけとして信仰されていて、僧道鏡も前述の虚空蔵求聞持法を修しており、また弘法大師（空海）も入唐以前にこの法を修していたといわれる。弘法大師の虚空蔵信仰は深かったとみえて、大師が開基された高野山金剛峯寺講堂にその像を安置され、その思想を体系化された五大虚空蔵菩薩図を弘仁十二年（八二一）に描いているといわれる（『仏像その心とかたち』）。わが柳津の福満虚空蔵尊が弘法大師作として伝えられているのも、このような弘法大師の虚空蔵信仰が深かったことなどからかもしれない。

理性的性格の他の面として虚空蔵菩薩が司るものは福徳である。大日経疏には、

「虚空は破壊すべからず、一切のものはこれに勝つことができない。蔵とは大宝あり、自在にこれをとり、貧乏を受けざらしむ」

とあって、虚空蔵尊は大日如来の福と智との二徳を司るとされている（『前同書』傍点筆者）。

虚空蔵信仰においても、一般庶民の信仰は知恵を授かるほとけとしてである（『仏像その心とかたち』）。とされているようであるが、わが柳津の虚空蔵尊をもとにすれば知恵とともに、あるいは知恵以上に福徳を求める心が一般庶民の心に強くあったからこそ、わが柳津の福満虚空蔵という名称が生まれ、あるいはその名にひかれて、古くより柳津の虚空蔵様として諸大名は勿論のこと、一般大衆一般庶民の根強い信仰をもたれてきたものと考えられる。円蔵寺宝物及び奥之院には、俗に三面大黒と称されていて庶民の信仰と深く結びついている毘沙門天・大黒天（円蔵寺蔵）・弁財天（奥之院弁天堂内但し吉祥天女ともいわれている）があるが、いずれも卓越した現世利益の能力をもたれるほとけ様方でいらっしゃるのも本尊虚空蔵菩薩の性格と関係づけてみると興味深いものがある。

(三)　虚空蔵尊と開運撫牛

たとえば『福満虚空蔵略縁起』にも、

「十二方に十二神あり、群生の本命を保護する神将たる諸仏・諸菩薩の垂跡ありて各々本願を垂れて衆生の願望を満足せしむ。虚空蔵菩薩は丑寅の方位にありて自在力を現す。菩薩の撫牛に縁古ある所故にして、撫牛の上に大黒天を勧請するは大黒天の本地虚空蔵菩薩にして衆生の楽欲にしたがって普門示現なればなり」（傍

点筆者）とあって衆生の願望・楽欲を満足せしめられる大黒天と虚空蔵菩薩の関係及び方位としての丑寅、さらに菩薩撫牛のことにふれている。

虚空蔵尊を信仰し開運を願うものに開運撫牛祭祀教式がある。それは、

「御牛を床の間又は違い棚、卓上等に安置し、黄色木綿の褥の上に据え、頭上の大黒天を勧請し供物を捧げ、時々御牛の背を撫でさすり、自ら縫いたる金袋財布等御牛の胴中に蔵めおき、霊験を感得せる毎に黄蒲団一枚宛増して礼賽の意を表するものである」

とされている。

会津の赤牛（あかべこ）は有名であるが、その縁起は古く円蔵寺虚空蔵尊をまつる菊光堂建立のとき、使用する大材を運ぶのに人々が難儀していると、どこからともなく赤牛の群がやってきて、その大材を運んだのでさしもの大材もたちまちにして運び終え、工事が大いに進んだということである。虚空蔵尊をまつる菊光堂（虚空蔵堂）及び別当円蔵寺建立は伝として、大同二年工事着手、弘仁二年完成、五か年の年月を費して、五間四面の菊光堂、五間四面の霊厳山円蔵寺及び五重塔が建てられ、七月十五日入仏供養されたとしてあるが、この建立にまつわる話に赤牛が登場してくるのもほほえましい。虚空蔵堂・円蔵寺の建築材は大野小柳津方面から伐出したのであろうか。

「伝曰徳一建於稲川荘大野邑光泉寺安於六地蔵矣徳一欲営於楊津堂宇材伐於此地……」

「小柳津時置工匠地也」

とある（『旧事雑考』集落誌大野小柳津参照）。人々と共に労役に従事した牛の活動が虚空蔵信仰からこの一話を生んだのかもしれない。

(四) 信長・秀吉らの虚空蔵信仰

虚空蔵信仰についての戦国期における伝えは数多いが、これらのなかでも織田信長や豊臣秀吉らが厚く福満虚空蔵菩薩を尊信した話は興味深い。織田信長は虚空蔵尊を信仰して毎年専使を差遣わして代拝せしめたが、ある時、特に霊験を感得せられたことがあったので、敬信の念いやまして、天正六年（一五七八）六月に江州安土城に当時の円蔵寺住職富山西堂和尚を招請して、厚く饗応されたといわれる。この時会津の領主であった芦名盛氏も家臣金上盛備を使として安土城に参上させ誼みを深くしたといわれる。この様子を楊津秘録には、

「翌日師與盛備登場　森蘭丸介之謁公　公喜賜珍品千師及盛備且使伝内導城内　薄暮蘭丸　率花飾舞童数十輩　至伝内許　伝命曰　吾公以慰公等旅情　於是揚灯連燭　恰如白昼　吹笛撃敢　舞童等曳　紫翻紅　舞踏者数回　乗興歎日　嗚呼天人舞楽　豈如之……」

と記述している。

また、豊臣秀吉が播州姫路城の城主であったころに、一夜、夢の

中に気高い老僧が現われて、「吾はこれ柳津より来れるものなるがこれを汝に授けん」と言って二本の竹箸を示し終えると、かき消すように姿が消え、夢もまたさめてしまったという。秀吉は不思議に思ってこの話を養子の秀次に語ると、秀次は、

「柳津の虚空蔵菩薩は仏威崇高、その霊験感応は殊に勝れていると聞いております。それゆえ信長公も深く虚空蔵菩薩を敬信されたのであります。信長公代拝の専使を召されておたずねになってはいかがでしょうか」

と秀吉に進言した。秀吉は直ちにその言を用いて使僧に虚空蔵尊の感応勝れたるを聞いてもっともに思い、秀吉の専使を送り、柳津虚空蔵菩薩を代拝せしめたといわれている。

秀吉が天正十八年日本全国統一の偉業をなしとげたことは、この夢が竹箸二本を授けられる「羽柴筑（竹）前日（二）本全国統一」というもので、福満虚空蔵尊の霊夢が正夢であったことを物語っている。秀吉は関東北条氏を倒して会津黒川城に入ると秀次を柳津に差遣して代拝せしめたといわれている。秀次は、この柳津の福満虚空蔵菩薩に尊信の念を抱き、天正十八年九月三日に羽柴忠三郎（蒲生氏郷）をして揚津本願（別当円蔵寺）に対して揚津領二百石を寄進せしめている。これが歴代大名の円蔵寺寄進二百石という始まりである。秀吉より会津領主に封ぜられた蒲生氏郷が円蔵寺領二百石を寄進したのもこの例によるものである。

これよりさき上杉景勝も福満虚空蔵菩薩を信仰してしばしば感応を得たといわれ、天正十五年（一五八七）には越後国股野村において、荘田二百石及び越前国の名石青石を以って刻んだ三十五仏を円蔵寺に寄進し、さらには慶長五年七月に専使をして代拝せしめたといわれる。これは景勝が越後国において新発田治長、長沢道寿斎らの反乱にあったさいに、景勝が福満虚空蔵菩薩の霊験を聞き、道俗三十五人をして怨敵退散の祈念を七日七夜にわたってなしたところ夢中に龍紋旗を賜わるをみて早速にこのことを景勝に報じた。景勝はこれを聞いて快然として、

「妙哉、其夜の夢、我も又かくの如し。虚空蔵薩埵の示すところ、豈疑うべからず」

と言い、龍紋旗を先頭にして五十公野におしよせ、ついに新発田、長沢の軍を滅した。ために、景勝は喜びに堪えずその謝恩にこれらの寄進をなしたといわれている。景勝が奉安した三十五仏は慶長十六年の大地震にあって龍宮渕に没し去ったが、後年に至りそのうちの五体を砂中より得て再安したと伝えている（『揚津秘録』）。

なお、景勝が虚空蔵信仰をとおして柳津円蔵寺子坊塔之坊と関係があったことを示す古文書がある。

去秋頓入宝前、参篭被抽幡幟成就之巻数守、幷五明紅燭送給、目出欣然之至候、彌武運長久懇祈任入候、恐々謹言

二月十四日　　景勝　判

塔之坊

というものである。（『新編会津風土記』）。

(五) 大鰐口を寄進した猪俣吉種

猪俣美濃守吉種（良種ともいう）は、戦国末期に細越村の領主であって、いわば柳津地方における土豪的存在の一典型と考えられる。吉種は、「請願成就皆令満足之所也」として、虚空蔵堂に掛ける大鰐口を寄進している。天正十五年十月のことである。鋳工は早山彦八郎定継であるが早山定継は後に蒲生秀行の命により、慶長十一年十月に円蔵寺の大鐘も鋳している。吉種寄進の大鰐口には、

「奉掛鰐口諸願成就皆令満足之所也　仍檀那細越村猪俣美濃守吉種　干時天正十五年丁亥十月七日　大工藤原氏早山彦八郎定継」

との銘が彫付けられていたといわれる。それは猪俣吉種寄進の鰐口が慶長十六年の大地震の際に只見川の川底に沈んだものを延宝五年（一六七七）十一月六日に至って引き上げられたさいに見い出されたといわれる。

(六) 将軍と歴代藩主の信仰と寄進

蒲生秀行は慶長六年会津領主になると、父氏郷同様に円蔵寺領二百石の寄進をするとともに、前述のように同十一年十月十三日には鋳工早山定次に命じてつり鐘一個を鋳してこれを奉納している。また同十七年には客殿を建てている。これは本堂伽藍が大地震のため一部崩壊したのを再建したともいわれる。

徳川家康の女振姫は初めこの蒲生秀行に嫁し、後に紀伊侯浅野長晟（ながあきら）に再嫁したが、虚空蔵菩薩を深く信仰されていた。慶長・元和の両役の際に父家康が老齢の身を以て親しく戦場に臨んだことを案じた振姫は、虚空蔵菩薩に父家康の武運長久、天下統一の念を祈願したところ、果して霊験現われて願望成就をみたといわれる。振姫はその霊験に酬ゆるためと、先夫秀行の罪償を償わんとする心情もあってのことか（慶長十六年に秀行は只見川に毒流しをした）、それまで山麓にあった本堂（虚空蔵堂）を現在の位置、厳上にそびえたつ菊光堂として新しく建てられたというのである（『楊津秘録』）。これ以後菊光堂は、現在地に再建されている。現在地建立以前は小川家裏の平坦地に円蔵寺とともに虚空蔵尊をまつる菊光堂が建てられていたことに注意したい。『楊津秘録』の元和三年の項に、

「三年紀伊侯浅野長晟（ながあきら）夫人振姫君　為立願成就　託旧臣外池伊織村田加兵衛　建大堂……改移岩上云……」

とある。また、会津年表にも同年の頃に、「柳津虚空蔵堂を厳上に遷す」とある。

ただし、疑問に思えるのは『会津正統記』に

「天正七年己卯三月七日ノ暮炎上　堂寺院並ニ宝器物神銘帳共ニ焼亡ス。黒川ノ大守葦名修理大夫盛氏修覆、又神銘帳ハ雀林法用寺ニ有之岡本坊正巻ヲ借リ写ス」、「本堂往古ハ円蔵寺ト同ジ地形ニテ独鈷水ノ際迠五間四方ノ御堂也　時ニ天正七年三月七日ニ堂寺院坊中民家共ニ不残焼亡ス。後黒川ノ大守葦名修理大夫今ノ地ニ引移シ七間四面ニ建立　階百七階横幅二間也其中段五十階下リテ独鈷水ノ上ニ明星ノ祠ヲ祭ル」（傍点筆者）

とあって芦名盛氏が「今ノ地ニ引シ移シ」、「七間四面ニ建立」した

としている一方、同書では、

「元和三年丁巳秀行ノ室殿堂建立　其時ノ別当住持有栄和尚也
普請奉行ハ外池伊織介、村田喜兵衛」

としていて、元和三年に秀行室振姫が殿堂（虚空蔵堂・菊光堂）を建立したことは記述されているが、厳上に建立したとは記述されていないばかりか、芦名盛氏が現在地に虚空蔵堂を建立したかのような記述になっていることである。旧事雑考の元和三年の頃には虚空蔵堂建立の記述はなく、前年の元和二年の頃に、

「十月……二十一日楊津及塔寺再建叙載是僧法界……」

と記述されていてこれまた記述が合致していない。

ところで、秀行の後に会津に移封されたのが加藤左馬介嘉明であるが、侯が予州松山にあった寛永四年にある夜の夢に高僧が現われ「予は柳津より来たれるものであるが、不日侯を予国へ迎え申すべし」と告げられたという。夢さめた嘉明侯が不思議に思って侍臣らに柳津の所在を問うが、だれ一人柳津の所在を知るものがなかった。侯も気にもとめずにそのままにうちすてておかれたが、その年五月に入り突然会津に移封され、初めて柳津の所在を知る機縁となった。かくて侯は虚空蔵菩薩の霊験を感じられ、同年五月五日会津城に入るや直ちに同八日に参詣されたといわれる。『楊津秘録』には、

「五月五日加藤嘉明、増封本藩始入鶴城、八日藩主登山礼拝　跣（先）登石階百余級」

とある。翌五年十月十八日には寺領二百石を「如先規全可有寺納者也」として寄進され、厚く保護され、一説には十万石の格式を持って遇されたといわれる。なお加藤嘉明書翰として、次の文言がみられる。

預使僧殊祈祷之御札並為歳暮之祝儀密柑一折送給令祝着候　猶期面之節候　恐々謹言

極月廿二月　　加藤左馬介嘉明　花押

円蔵寺床下

また、会津藩主として寛永二十年（一六四三）に会津に入部された保科正之公も先規に従い寺領二百石並びに山林等を寄進されたがこれは松平氏が藩主となっていた明治維新迄に厚く保護され続けられてきたのである。

陸奥国会津領柳津虚空蔵領之事

一、高二百石　此物成

京銭　五十貫九百九十五文　屋地子出分
同　五十二貫二百八十一文　田畑之出分

此外

一、大平山　一、堂森山　一、地蔵堂山　一、大岩山

右如先規所充行如件

肥後守

寛永二十年十一月十五日

別当円蔵寺

寺領二百石の外に山林として新たに寄進された山林、堂森山・大

平山・地蔵堂山・大岩山は円蔵寺の東南部にまたがる山々で、その範囲は現在の青年の山（おぼだき地蔵のさき）を中心とした細越・八坂野・旧柳津本町にまたがる大平山から、現在の円蔵寺裏の堂森山、早坂峠一帯の地蔵堂山、月光寺裏の通称山居山から愛宕神社をまつる山一帯の大岩山という広い範囲にまたがるものであるから、いかに虚空蔵尊をまつる円蔵寺に意を払っていたかがおしはかれる。これらの円蔵寺領のために藩政時代には柳津では村の肝煎のほかにわざわざ寺領肝煎を設けているほどである。この寺領肝煎には寺家町の小川家が代々襲職していた。

徳川将軍家でも歴代虚空蔵菩薩を信仰されていて、三代将軍家光公は円蔵寺所蔵の弘法大師作と伝えられる大黒天像を江戸城に拝請し、四代将軍家綱公の代に至って返されたといわれている。中でも六代将軍家宣公は特に霊験を感得せられたことがあったので、円蔵寺を以て永久祈願所となし、白綾の産着を始め数多くの貴重な品々を円蔵寺に寄進されている。また、円蔵寺の住職は江戸城に登城して将軍に謁見することが許されていた。これは元和五年（一六一九）宥栄和尚が円蔵寺住職を務めていたときに始めて二代将軍秀忠公に江戸城白書院で謁見したもので、宥栄和尚は此時大判紙及扇子を将軍家に献上し、将軍家よりは時服五領、白銀三十枚を受領したといわれる。随行者は杉本坊正悦（桜本坊正悦か）及び会津藩士日下清右衛門であった。この謁見は浅野長晟（ながあきら）室振姫が将軍家康の息女であり、かつ虚空蔵信仰を深くし虚空蔵堂建立をなしたことと無縁ではなかろう。

この謁見以来、円蔵寺住職は五年ごとに江戸城白書院において将軍に謁見し、時服二領、白銀十枚を受領するのが恒例となっている。現在円蔵寺に保存されている駕篭はその往還のさいに住職が使用したものといわれているが、この外に将軍家より拝領した江戸城出府のさいに使用した葵紋入りの長持もある。これには御祈願所円蔵寺御祈祷用の札を付け往還したものである。なお、円蔵寺は将軍家に対して明治維新の際まで年々正月・五月・九月の三回祈祷の宝版を上進して白銀三枚宛受領していた。明治に入っても、旧幕臣山岡鉄舟の努力により、明治二十年（一八八七）三月には当時の金額にして壱百五拾円を保存金として内務省より下賜されているほどである。一説には菊光堂の菊花紋が許可されたのも、この鉄舟の努力によるものであるという伝えもあるが、『楊津秘録』によると、古く菊光堂に菊光仏をまつったときに菊花紋をつけたとあってその真偽のほどは判然としない。なお円蔵寺では藩政時代において江戸で御開帳をしたりして、江戸庶民との信仰的なつながりもあったといわれる。

松平氏も藩主を始め世子・奉行等が虚空蔵尊に参詣したし、幕府の巡見使（監察廻国使）等も会津に入れば必ず登山参拝したものである（『楊津秘録』）。

以上述べてきたように虚空蔵尊の霊験・御利益はあらたかで既に天正年間には（天正十三年九月）細越村領主猪俣美濃守吉種（良種）は虚空蔵尊縁起について版木をつくり『仏説虚空蔵　陀羅尼経』と

名づけて出版していることは特筆に価いする。

なお、天保五甲午年（一八三四）には円蔵寺住職南山謹識、彫刻料出吉村寛泰とする柳津虚空蔵尊縁起と沿革とを記した出版物のあることも虚空蔵尊の幕藩期における宣伝パンフレットと考えられて興味をさそうものである（岩坂町矢部家所有）。

(七)　菊光堂（虚空蔵堂）の変遷と信者の協力

虚空蔵堂建立は『会津正統記』によると、

「徳一大野村山ニ入テ堂材木ヲ伐リ堂塔ヲ建立、弘仁二年壬辰成就ス　七月十五日入仏供養、号二菊光堂一称二福満虚空蔵菊光仏一」

とある。その後幾多の災厄にあい廃失することしばしばあったが、二百石の寺領と領主の保護及び信者の喜捨等によって常にもとよりも優れた宏荘な御堂を建立することができた。これらはいかに虚空蔵菩薩に対する衆徒・大名・庶民の信仰が根強いものであるかを示すものである。

中でも室町末期の元亀初年に当時の住職厚源和尚並びに六衆徒の非常な努力によって財を募り虚空蔵堂を再建したのは特筆に価する。当時の御堂は柱に金銀をちりばめ、縁に彩画を施し、輪奐（りんかん）躍躍壮麗を極めたので、時人これを「光堂（ひかりどう）」と呼んだといわれる。

元和年間に虚空蔵堂は現在の厳上に移転したが（前述）現在の虚空蔵堂は文政元年（一八一八）の火災後、住職喝厳和尚を始め六衆徒及び信者等の非常な尽力と藩主松平家の特別の保護とによって建立されたものである。

この虚空蔵堂は、二重破風で下部は大唐破風造、桁行十一間半、梁間九間、棟高十八間、四方縁二層四稜の大伽藍で、東西十二間、中五間余の外縁（俗に舞台）という規模であるが、元亀年間の光堂に比すると聊か美観を欠くかもしれないが、次の特長を具えているすばらしい堂宇であり、全国稀有の誇り高いものである。

(1)一切色彩を施していない
(2)白木造りの壮厳なものである
(3)巨大にして堅牢な用材を用いている
(4)材料はすべて欅材のみで他材を用いていない
(5)内部外部に秀れた彫刻を施されている

この再建工事は何しろ大堂であるために多くの経費と年月と人々の労役とを要している。『楊津秘録』には、

「本堂本坊　大火延焼　因給本堂材木　且為本坊貸金三百両……又許封内勧化」、「十一年始建本堂大柱」「八月上棟」「十二年六月　自本堂土木事起　借銭財官府　積及数千両　不能一朝償　於是宗都郁攀援官府　乞之覇府　借財銀座者三千両納之官府　毎歳息銀　以償之　而復銀座　以封内所穿鉱銀　八月十三日本堂落成」

などの記述がみられその苦労のほどが偲ばれる。虚空蔵堂の屋根を銅板に葺替えた昭和三十二年のとき発見された杉木羽（こば）には、

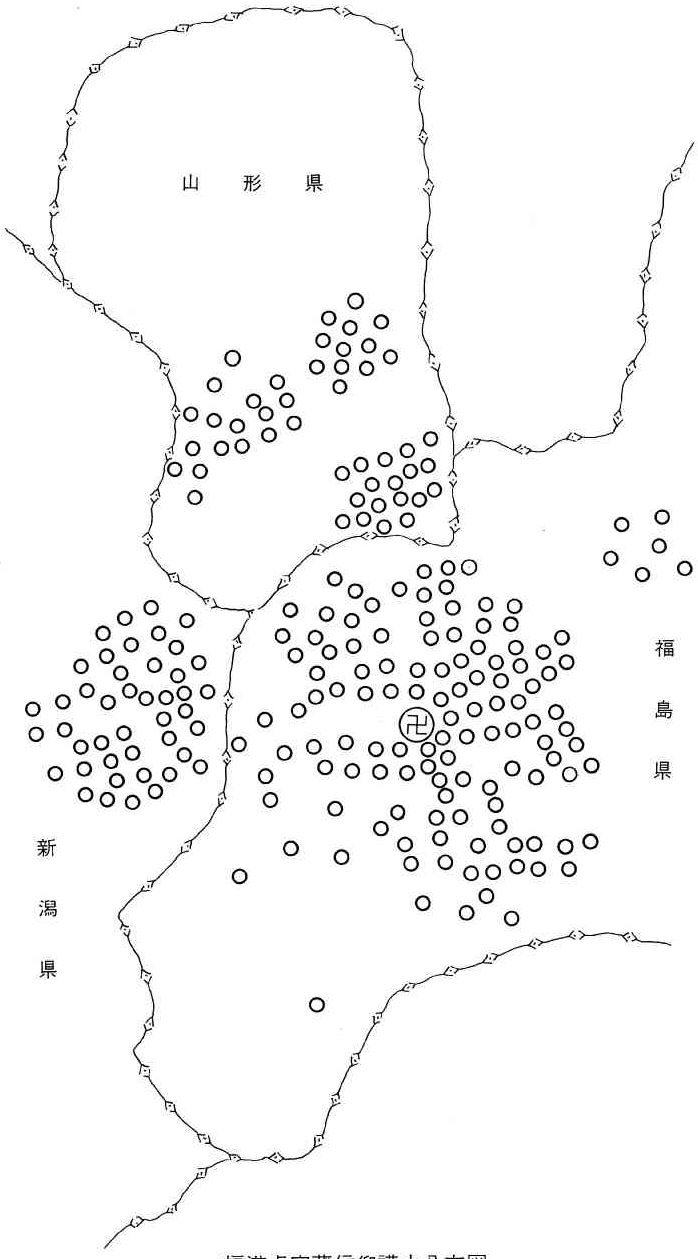
「本堂屋根板　丙戌霜月田代……」

の墨書名がみられる丙戌の年といえば文政九年（一八二六）にあたる。また再建棟札として、

「奉再建満願虚空蔵大薩埵寶殿　大壇越松平正四位下中将肥後守源容敬朝臣　衆徒岡本坊柳本坊桜本坊塔之坊杉本坊月本坊　文政十有一呈舎戊千秋八月十有三日上梁良辰　現住円蔵傳燈沙門喝岩宗環謹識」

その他の記載がみられる。これらの資料からみると、虚空蔵堂の上棟は文政十一年八月十三日、その落成は文政十二年八月十三日となるわけである。十三日という日は虚空蔵尊にとって御縁日であるから、上棟・落成・行遷座ともに十三日を選んだものと考えられる。

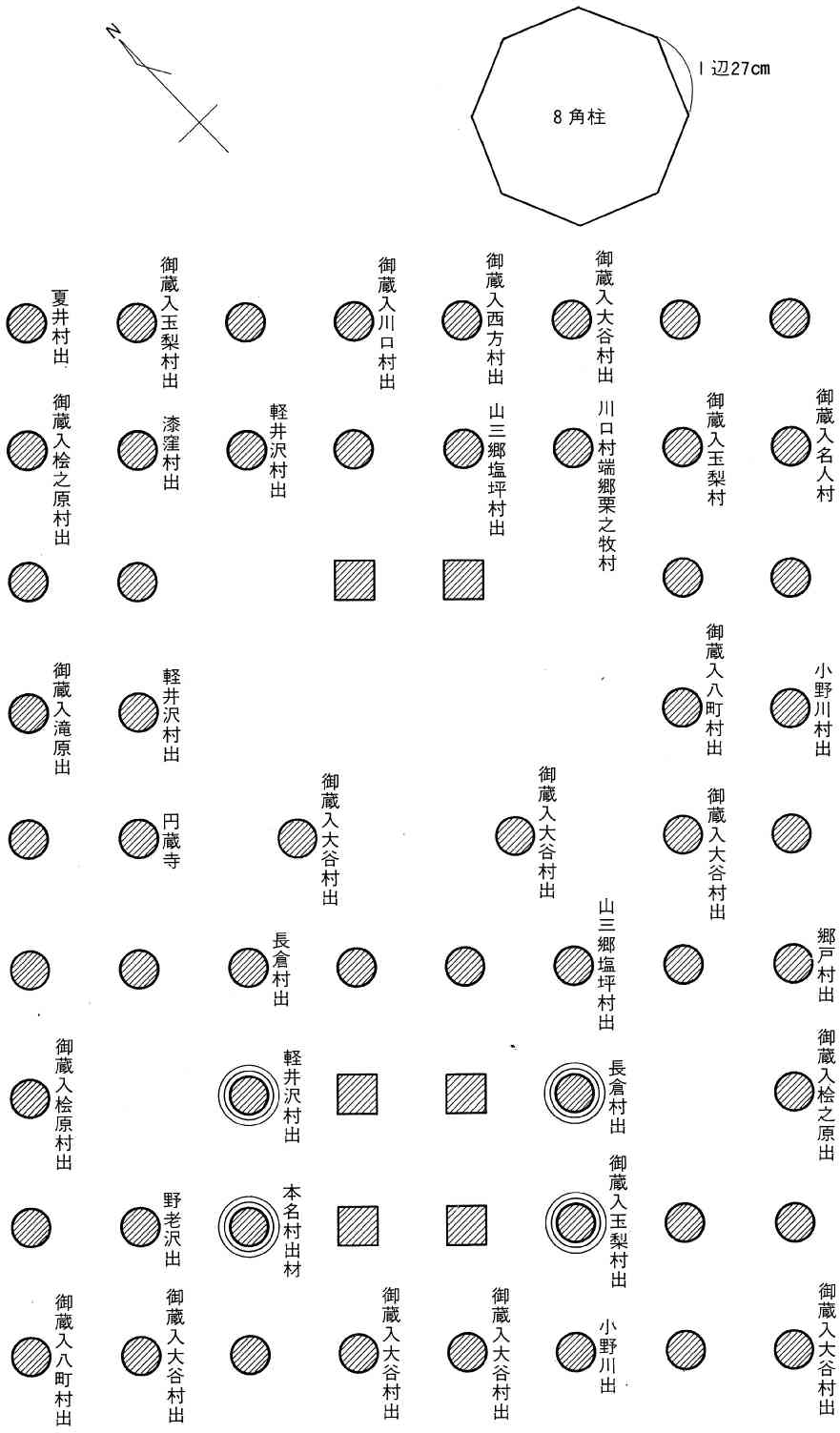
この再建には、幕府、松平家をはじめとして、会津一円はいうまでもなく、越後・出羽・上野・下野に及ぶ一般庶民の小さな喜捨が募られて大きな力となったといわれている。住職の喝岩はじめ六衆徒は各地に行脚してその勧進に務め非常な努力を払ったといわれるが、各地の庶民の虚空蔵信仰もまたいかに深かったかを物語っている。会津地方をはじめ、新潟県・山形県内には虚空蔵信仰をもとにした福満講・十三講などの講中の存在はきわめて大きな存在である。信仰圏の講中分布をみても、会津一円のほかに、新潟県・山形県に講中が多く分布しているのがその特徴といえよう。



福満虚空蔵信仰講中分布図

なお、文政十二年落成のこの虚空蔵堂の床下に入って、これらの欅の立柱に記名されたものからみると、御蔵入地方からかなりに伐採または寄進されたことがわかる。

この床下にみられる立柱は一辺が二十七センチメートルの八角柱であるが、左記の図のような出材地を示している。



菊光堂（虚空蔵堂）柱出村地（床下の書き付けによる）

虚空蔵尊信仰関係年譜表

年	内容
慶長五年	上杉景勝使近臣登山代拝。
慶長十一年	藩主使早山定次大鐘鋳造。
慶長十六年	蒲生秀行只見川に毒を流す。(伝、仏罪にて翌十七年死す)
慶長十六年	賓頭盧尊音像川向いに現わる。端光山と名付く。
慶長十七年	藩主登山礼拝。
慶長十八年	宝海上人、文禄四年洪水のさいの巨鐘を以って鰐口を早山定次に鋳造させる。
元和二(三)年	浅野長晟夫人振姫虚空蔵堂を厳上に建つ。
元和五年	宥栄和尚、将軍秀忠に謁見する。
寛永四年	加藤嘉明登山礼拝。
寛永五年	加藤明成登山礼拝。
寛永九年	幕府廻国使分部左京亮・大河内平十郎・松田善右衛門、登山礼拝。
寛永十五年	加藤内蔵助登山礼拝。
正保元年	保科正之登山礼拝。
明暦元年	岩彦君（保科正頼）登山礼拝
寛文二年	鳳翔君（保科正経公)礼拝。
寛文三年	藩公疾重く円蔵寺大磐若転読、遂日平愈。
寛文三年	奉行菅荘兵衛封内巡行、登山礼拝。
寛文五年	藩子世子登山礼拝。奉行赤羽市右衛門登山礼拝。
寛文七年	幕府廻国使佐々又兵衛・中根宇右衛門・松平新九郎登山礼拝。
寛文七年	老臣田中正玄藩公のため登山礼拝。献白銀五枚。
寛文八年	岩彦君登山礼拝。田中正玄・菅壮兵衛ら従う。
寛文九年	藩主鳳翔君登山礼拝。
寛文十年	只見川より寛永八年水没の鐘引きあげる。
寛文十一年	吉川惟足・服部安休登山礼拝。
寛文十一年	毎月十三日建福庵に会するため積立銭をする。
寛文十一年	岩彦君のため原徳左衛門登山懇祈。
寛文十一年	岩彦君のため村田甚之亟登山懇祈。
寛文十二年	金剛両神像を二王門に安置。道俗の募縁による。
寛文十二年	儒者林門入登山礼拝（会津藩士随行)。
寛文十二年	藩公のため原甚右衛門登山参篭。
延宝二年	藩公登山礼拝。
延宝二年	舞台修理全成。
延宝三年	米沢石藤勘左衛門、男子に恵まれ虚空蔵尊に献金五十両。
延宝四年	藩公のため山口左助登山懇祈。
延宝五年	十一月六日、慶長十六年大地震のさいの鰐口を只見川より引きあげる。猪俣美濃守吉種が天正十五年十月七日に奉納したもの。
延宝六年	遠藤市郎衛門、藩公のため登山懇祈。
延宝七年	荘田久助、藩公のため登山懇祈。
天和元年	監察廻国使、保田甚兵衛・佐々木喜三郎・飯河伝右衛門登山礼拝。
天和三年	大日堂を始めて作る。仙台藩伊達阿波作堂料寄進。
貞享二年	奥之院再建。
	霊厳雑記成る（松蔭和尚)。

元禄　二年	藩公登山礼拝。
元禄　四年	虚空蔵堂舞台腐朽のため新作。役夫千余人。建福庵再建。
宝永　年間	是宗和尚、将軍家宣（文照大君）に謁見する。時服二領白銀十枚を賜わる。
享保　二年	出倉村下流六町、両岸殺生を禁ず。
享保　十年	藩公及び公子登山礼拝。藩公館本坊。公子館建福庵。
享保十一年	本堂壮厳に全成。
享保十三年	秘像開帳。数多くの庶民あつまる。投銭雨の如し。
宝暦　元年	本坊再建落成。
宝暦　六年	鐘楼転地。善美倍旧。
安永　九年	本坊焼失。現在地に庫裡上棟。
天明　六年	客殿落成。
天明　八年	幕府巡見使藤沢要人ら登山礼拝。古川古松軒随行。
寛政　五年	世子貞照君登山礼拝。
寛政十一年	三重塔再建開立。
享和　三年	杉本坊建福庵に移す。建福庵を廃す。
文化　元年	旭州和尚将軍に謁見。時服白銀を賜わる。
文化　五年	三重塔落成（天文四年以降二七四年）。
文化　六年	旭州和尚将軍に謁見。時服白銀を賜わる。
文政　元年	六月十五日失火、本堂・本坊・三重塔・六坊民家一〇六軒焼失。
文政十一年	始めて本堂大柱を建つ。
文政十二年	八月十三日本堂（虚空蔵堂・菊光堂）落成。
文政十三年	喝岩和尚将軍に謁見。時服白銀を賜わる。
天保　五年	香林和尚将軍に謁見。時服白銀を賜わる。

(八)　金灯篭

水殿の前にあって、古色蒼然雅致に富めるものである。宝永七年（一七一〇）に江戸の住、功徳山主重矩が藤原俊光に作らせて寄進したもので左の銘がある。

霊厳禅刹　香集梵宮　人捨財宝
地肇灯篭　借大治手鎔金鑄銅駄貧女力
洗雨磨風　漸々啓蒙　光明遍照
八面玲瓏

菊光堂詠句

欄干を縫う青東風のわたりかな　柳　渓
薫風や菊光堂の御紋章　芳　亭
長梅雨や虚空蔵堂の大庇　里芋人

(九)　七日堂のおこり

今から千年ほど前、この地方に悪い病気がはやりました。人々はおどろいて手をつくしましたが効めがなくて死ぬ人がふえる一方です。ところがある日のこと虚空蔵様からのお告げがありました。「只見川の亀石の奥深くには竜宮があり、そこには宝照の玉という玉がある。この竜神の持つ玉を取ってくれば、病気はすぐにもなおるだろう」というのです。

人々はこれを聞き、大そう喜んでさっそくこの玉を取りに行く人を決めることにしました。その結果、弥生姫という美しくりこうな女の人が選ばれたのです。姫は危険をおかし、いろいろ苦心の末に

みごとに宝照の玉を手に入れました。人々がさっそくこの玉を虚空蔵様に供えますと、果して夢のお告げのとおり村々の病気はなくなり、もとのように平和なくらしが訪れてきました。それから数年たちました。人々は悪い病気があったことなどいつしか忘れるようになりました。それほど平和なくらしが続いたのです。

ところがこの楽しい生活をうちこわすような悪いしらせがやってきました。「宝照の玉を取られた竜神がこの玉を取り返しにくる。しかも一年中でいちばん静かな正月の七日の真夜中にやってくる」というしらせなのです。宝照の玉が取られたら、平和な村には再び悪い病気がやってくるでしょう。村人は大へん心配しました。しかしただ心配してばかりはいられません。みんなの力でこの平和と幸福の玉を守らなかったら、また悪い病気がはやりだし、村人は滅びるかもしれません。人々は力を合わせて宝照の玉を守ることにしました。「宝照の玉を守れ」「平和と幸福の玉を守れ」人々はこのかけ声のもとに、岩代・越後はもちろん、遠く出羽・関東の国々からも信者たちが集ってきました。

いよいよ正月七日の夜がやってきました。虚空蔵堂からの一番鐘がやみをついてなり渡ると、人々はふんどしひとつの裸すがたで、「ヨイサ、ヨイサ」のかけ声も勇ましく虚空蔵様の本堂へとかけのぼりました。そして宝照の玉を取り囲んで、竜神などにこの平和の玉を渡してなろうかと勢いこんでもみ合いました。

一方こちらは竜宮渕の竜神です。長い間人間に取られてしまった宝照の玉をきょうこそ取り返そうとして、草木もねむる丑満どきにその姿を亀石の上にぬうっとばかりに現しました。ところが虚空蔵様の方をみておどろきました。人々のかん声は霊厳山を動かすように鳴りひびき、たき火の光は昼をあざむくような明るさです。「これでは玉を取り返すどころではない。それにしても一年で一番静かな今夜でさえこのありさま。ふだんの日にはどんなにぎやかなことなのだろう。ともかく今夜はだめだからまた来年くることにしよう」竜神はこう思って只見川深く沈んでいってしまいました。

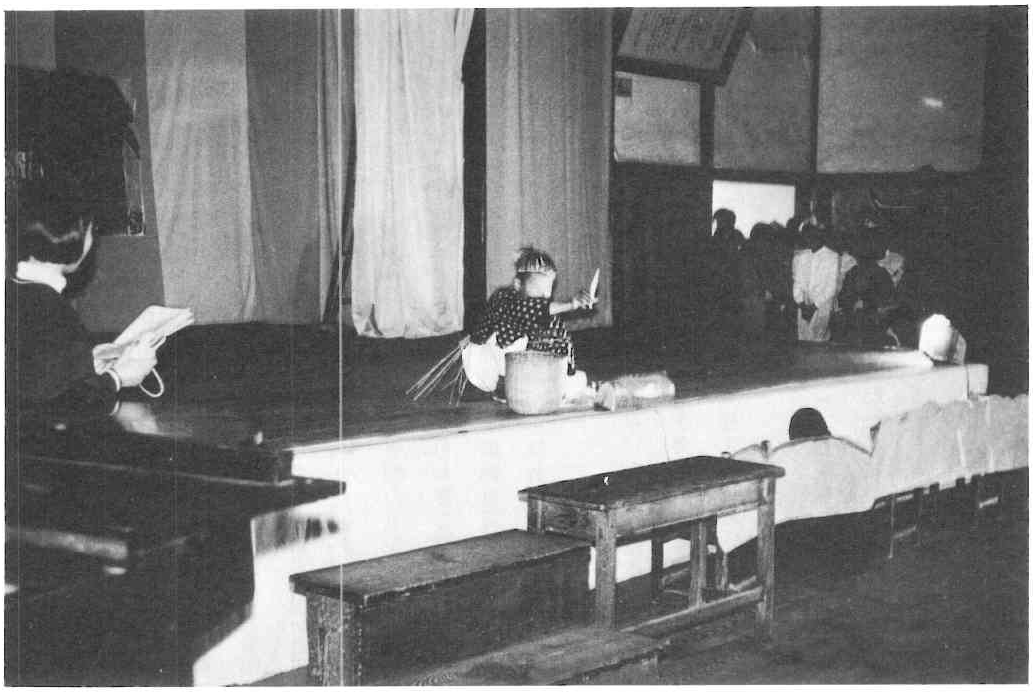
竜神の去ったのを知った信者たちは、平和の玉を守りぬいた喜びにどっとばかりかん声をあげました。降りしきる雪の中で虚空蔵堂の大屋根からは、悪魔退散・幸福来訪・無病息災を表わす三百六十五本の牛王（ごおう）の矢が降りまかれ、信者たちはわれさきにとばかりこの矢を拾い合いました。

このようにして人々は団結の力を知り、信仰の強さをさとって、おたがいの心を合わせれば苦難や災厄を乗り切ることができるという自信を持ったのです。これが七日堂裸まいりのいわれと伝えています。

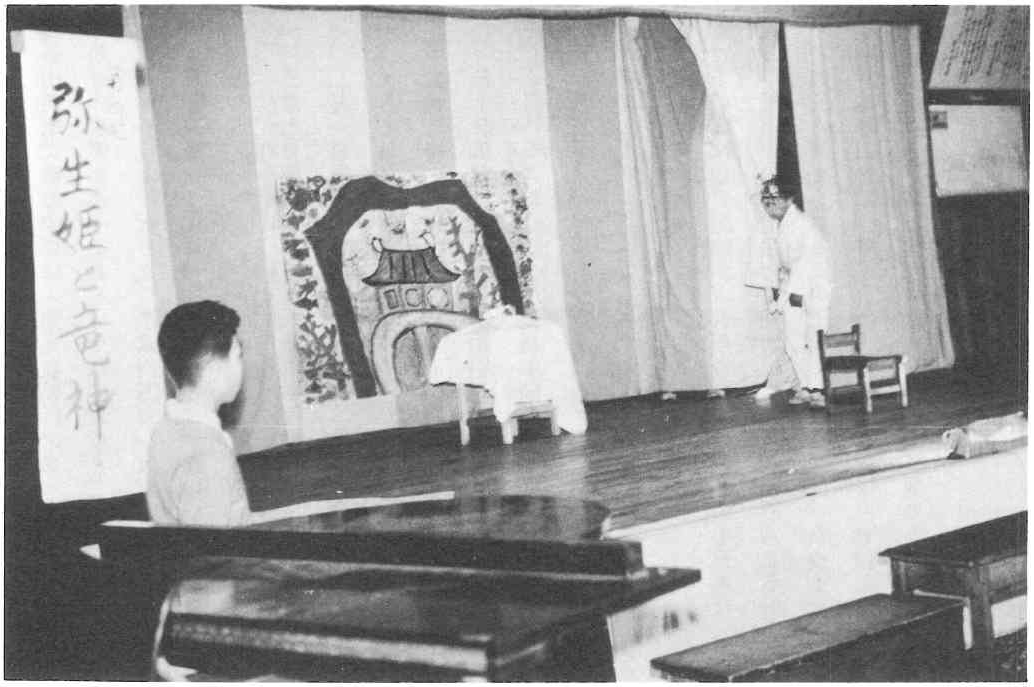
この七日堂裸まいりは、正しくは「虚空蔵堂牛王祭（ごおうさい）」というもので、千百余年の伝統を持って毎年行われ、素裸の信者たちが積雪をけってひしめき合う姿は実に壮観であり、福島民報社が募った福島県内十大祭の中にも入っている。ただ由緒ある「牛王（ごおう）まき」は、新潟県弥彦神社の惨事にかんがみ、昭和二十九年からは素裸になった

民話劇「ほうしょうの玉」の上演

宮下小　6年児童全員



悪人をもった漁夫は魚渕からさかなをとる。



やよいひめから「ほうしょうの玉」をとりかえされた竜神。

五月　柳津講　昔より広くは越後のあたりより尊崇せられ各々講中により て年々柳津詣りを行う。藩よりは御殿様にもお詣りありたる趣き御家中にては云うに及ばず。其の盛んなる事言語に絶せりと今も猶魚渕の魚群多けれ共波間の大魚轟々たる大渦巻きの唸なりもしのぶべくもなし。

信者に「幸運の矢」として授けるという方法に改められている。

滝谷山内家文書の中には「菊光堂勤行之事」として、菊光堂における勤行の次第が述べてある。それによると、

一、正月一日より七日迄行法其内四日ハ大磐（般）若経転読ス
一、毎年五月一日九月一日十一月一日十五日ハ大磐（般）若経転読ス
一、正月七日夜丑ノ刻三百六十本牛王杖ヲ投ゲル初テ開宝扇（前）
一、三月一日為祝融ノ祈祷アリ
一、正月七日ノ夜読錫杖経法華懺法後ニ虚空蔵経ヲ読ミ同和讃大磐（般）若経唯識経初夜道師懺悔仏名唱後夜導師三十二桐三十五仏宝号日本神銘帳並牛王宝印曼陀羅他
一、正月八日ノ朝心経会法読誦牛頭天王ノ祭記并長サ三尺二寸横一尺二寸ノ板ニ書写シ大磐（般）若心経一巻且ツ張龍家ノ縄ヲ二王門心経是ヲ書写シ板十二神将名書写浮木掛之祈ル追時行疫千里外者乎　（傍点筆者）

とあって、これらの記録からも七日堂裸まいりの牛王祭は、招福・除災の牛王宝印の加持法会に一般民衆の参加がみられる特殊な形の祭りであると考えられる（牛王宝印というのは、奈良東大寺の二月堂、紀伊高野山および熊野三山、京都祇園社などで頒布した木版刷りの厄除護符で、もと熊野に始まり、のちに他の寺社がこれをまねたという）。

(10) 十三まいり・九月堂おこもり

十三講・十三まいりは、柳津福満虚空蔵尊信仰において盛んに行われているものであり、現在も柳津町内の数え十三歳となる女の子などは、盛装した和服すがたでおまいりするほどである。

十三講・十三まいりは、虚空蔵尊縁日にあたる三月十三日に数えて十三歳の男女が虚空蔵尊に参詣して生涯の運勢を祈願するものでこの日は、七日堂・九月堂おこもりとならんで虚空蔵尊三大祭のひとつとなっているが、現在は、新暦四月十三日が十三講まいりの日となっている。小学校六年生のときに数え十三歳となる子が多いので、かつては、この日は遠近を問わずこれらの子どもたちが参詣したものであるが、現在では、広く会津一円、県内中通り方部、新潟県方面から、この日にではなくて小学校の修学旅行または遠足の一環として虚空蔵尊を探訪し個人参詣させる学校が数多くみられる。特に四月から五月にかけてはにぎやかである。

九月堂おこもりは九月三十日の夜の行事で、かつては、この夜に老若男女貴賤都鄙を問わず雲の如くに集まり、本堂内に参篭する者玄如節の掛け合いに興ずる老人たち、または、盆踊り・草刈り踊りなどの思い思いの踊りの輪をえがく者などで大いににぎわったもので、街には露店が軒を連ねて野趣あふれる行事であった。戦後は交通規制などにより露店の店掛けも少なく、かつての面影をしだいに失いつつある。

(11) 五月講まいり

五月中に忙しい田植えの農事を終えた各地の信者、特に新潟・山

形県方面から、二十人・五十人と講を結んで虚空蔵尊に参詣し御開帳を請う祈願である。最近は交通機関の発達にともない、大型バスを利用して訪れる信者が多い。特に野沢の山の神信仰の関係もあって、六月に入ると国道四九号線・二五二号線を利用しての野沢・柳津の観光と信仰とがルート化しているようで、今後はこの傾向が多くなると考えられる。また栃木県・茨城県にも各五つの講が結ばれ代表者もいる。

二、来柳名士録

(一) 古歌・柳津十二景

山紫水明・風光明媚・四季おりおりの美しさ。加えて千有余年の虚空蔵信仰のふる里わが柳津。それを慕って柳津を訪れる貴人・庶民・文人墨客は古来より数多くあった。

柳津の風景は柳津十二景として次のように古歌に歌われている。

霊巌秋月　園中将基茂朝臣

いつくしき巌の露に宿り来て
影も世に似ぬ秋の夜の月

奥之院晩鐘　花園待従公熙朝臣

奥山の御法のにはの寂しさも
想いやらるる入相の鐘

堂森春霞　唐橋右大弁在経卿

松か枝の稍も春はくれないに
匂ふや花の霞むなるらん

月光寺糸滝　正五位下山本公弘

繰りためていつ山姫の織りぬらん
絶えずも落つる滝の白糸

下田落雁　持明院少将藤原基延

眺めやる下田はるかに幾列か
友打連れて落つる雁がね

只見渡舟　柳原右少弁隆光卿

つながるる心しのばや青柳の
糸によりても舟は行くらむ

巻村時雨　中山待従忠能朝臣

常磐にて色もかわらぬ巻村は
時雨にのみや冬を知るらむ

魚渕清涼　桜井正三位供秀卿

魚渕にひれふる数もみゆるまで

底行く水の色は澄みけり

沼沢朝霧　　富小路左衛門佐貞随朝臣

隔つべき朝の霧にぞるり沼の
深き心はあらはれにけり

戸原眺望　　梅小路正三位定肖卿

夕日さす戸原に通ふ山賤や
越ゆべき坂の道急ぐらむ

中橋夕照　　中御門待従資文

挽き渡る駒の足掻きも急ぐ見ゆ
夕日照らせり里の中橋

飯谷初雪　　姉小路少将公遂朝臣

今幾日ありて里にも降り積む（ん）
飯谷の嶺の今朝の初雪

(二)　連歌師、猪苗代兼載の来柳

俳句の初まりである連歌という文化は室町時代に大変盛んであったが、その連歌師として著名な宗祇と並び称せられたほどの人が猪苗代兼載である。ある書に、

「猪苗代兼載、連歌師。陸奥国猪苗代小出方村（小平潟か）の人、会津の領主芦名氏の支族なり。文明元年村主石部丹後守一女子あり。状貌極めて醜劣、壮年に至りて偶なし。因て之を邑の菅神廟に祈る。一夜異人あり来りて梅花一朶を左袖に投ずると夢みて乃ちはらみ、十三ケ月を経て一男子を挙ぐ。之を兼載と名づく。兼載幼にして穎悟（えいご）、薙髪して若松の自在院に入り僧となる。資性和歌を好み、福を住吉社に祈り、屢々（しばしば）連歌会に臨む。而して秀句毎に多きを以て、衆の為に猜忌せらる。遂に憤激して京師に入り、宗祇を見る。宗祇其の博く経史に渉り、兼て連歌を能くするを以て、己の業を嗣がしめんと欲し、之が氏族を問ふ。是に於て兼載姓氏を芦名盛舜に乞いて猪苗代と称し、宗祇の譲りを受け花下の称を襲う。又耕閑斉と号す。永正七年二月十七日没す。兼載雑談の著あり。宗砌、心敬、宗祇等の先輩の説を始め、和歌に関する逸話を載す。此中『松月は一生の間の歌に未来記をのがれたるは十首ともあるまじ』等の記事あるを見れば、二条家の家学を墨守せしにや。又歌道は熱心譜代禄器用の四なければ天下の名誉とはなり難し。と云えるは当時に於ける歌壇の状況を見るべし。子孫世々その業を継ぐと云う」

と譜している。もってその概略が窺知できる。このように会津生れの連歌師である猪苗代兼載が中央に出て大いに活躍した反面に、会津領主芦名氏の庇護のもとに芦名氏を始めとして会津地方に連歌を広めていたわけである。

この兼載が柳津円蔵寺や三島町大谷の円福寺において連歌会を催したさいの句として

川霧や　音に船ゆく　ゆふべかな　（柳津円蔵寺にて）

雨さむし　半天までや　春の雪　（大谷円福寺にて）

がある。当時の円蔵寺は地方の文化的な中心でもあったろうし、只見川の風光を偲ばす一句である。

なお、寺家町小川トメ氏宅には兼載の作とみられる連歌がのせられた歌巻物が所蔵されている。

(三)　安井息軒と柳津遊記

安井息軒（一七九六～一八七六）は江戸時代末期の儒者であり、本名は衡、字は仲平といい、息軒と号した。日向国（宮崎）飫肥（えび）の産で、醜男であったがすぐれた見識を持ち、彼を夫とした妻女の結婚にまつわる先見の明あった話は有名である。二十二歳のときに大阪の篠崎小竹に、二十六歳のときに昌平黌に入るとともに松崎慊堂に師事した。二十八歳で故郷飫肥に帰って藩公の侍読を務め、翌年には転じて藩学の助教となった。さらに四十歳に至って再度昌平黌に入学し、遂には六十五歳のときにこの幕府昌平黌の教授ともなって、塩谷宕陰・芳野金陵とともに官学振興に盡したといわれる。彼の学問は漢・唐の古注を重視するものであったから、朱子学を尊重する昌平黌の教授に抜擢されたのは破格の異例とされている。主著に『管子纂話』『読書余適』『息軒遺稿』『左傳輯釈』『論語集説』『大学説』『中庸説』『孟子定本』『毛詩輯疏』などがある。

柳津遊記　　安井息軒

予旧聞柳津之勝　又欲一往間之只六里　蹶然而出行官道四里　至桁宮（気多宮）而左折　山川皆風陽秋如燬心頗悔且行且止　既而逢一阜　地勢陡変巨流西来　曰只見川（いう）　怪巖底捲而起　聳為両岸互相畳架　如舟如楼　皆銀錫也　為劈斧皺蘓　閣構於上　輪奐入雲　即柳津　閣下曰魚潭（いう）　深碧無底　小渓東南注之　僧房市廓挾渓而居　皆倚奇岩負怪松　無一凡形　信乎名不虚傳也　降磴道十数級　皆片石刻成　出吹雲関　渡橋沿小渓而北　臨漁潭　渓鮮魚群浮　隅々待餔　女児鬻餌者　群来相呼　買而投之　溌溂争食須臾便盡　遂擇潭上　最勝桜而宿焉　賤廟塔直壓眉宇亦快也

(四)　頼三樹三郎の来柳

頼三樹三郎（一八二五～一八五九）は、頼山陽の第三子で、名を三樹三郎・三樹八郎、諱（いみな）は醇、字（あざな）は子春・士春、号を鴨崖というが自らの性格行動を諷して、古狂生・狂生・百城・三竹園・酒為生楼主人などとも号したが、最も著名なのは三樹、または三樹三郎で、次に鴨崖の名が世人に多く知られている。京都三本木において生を受けたので幼名を三木八・三木八郎といい長じて三樹（三樹三郎・三樹八郎）と別称したのである。

性剛毅にして幼少より穎悟、その詩人としての天分も抜群であって、祖父春水、父山陽の名を辱めなかったのみか、書においても一家風を格し、堂々新天地を開拓している。彼はそれらの芸術的才能

に加えて、父山陽の学問的思想を越えて実践的に勤王の志士として行動し、国事に奔走した。剣を筆に代えての気概を示したことに彼の真面目があるといえる。

十六歳のとき大阪に遊び、十九歳のとき江戸に出て昌平黌に入り頼山陽と並び称せられた詩文家で朱子学の大家であり、さらに陽明学に通じていた佐藤一斎に学ぶとともに、文においては山陽を宗、詩においては星巌を北斗とされた梁川星巌、及び菊地五山に詩の指導を受けた。後年、三樹三郎はこの梁川星巌をはじめ梅田雲浜らとともに尊王攘夷運動を起し、ついに世にいう安政の大獄に捕えられ安政六年（一八五九）三十五歳の壮年にて江戸において処刑されたのである。

三樹三郎は性豪放で酒を好み、酔えば狂する癖があった。ある日酒の酔いにまかせて徳川家菩提寺である寛永寺の葵紋入りの石燈篭を押し倒したといわれるが、これはあながち酒の上の狂たるものではなく、三樹三郎が心中期するものがあってといわれている。この事件後、昌平黌を退寮させられた彼は、直ちに北辺壮遊の旅に出立するのである。弘化三年（一八四六）四月十二日に江戸を発程し、「雖ニ爾落魄一志何屈　学直欲ニ窮五大州一」の意気を以て北遊の途に就いたのである。時に三樹三郎、年二十一歳であった。

三樹三郎は、草加・杉戸・古河・館林を経て日光山を登り、中禅寺湖・華厳の滝を見て南会津の地に入り、会津若松城下で父山陽の親友、浦上春琴の兄、秋琴を訪うた。一説に三樹三郎が会津来遊をなしたのは藩黌日新館の学風を慕ったものともいわれる。この後、中山峠で蒲生氏郷の雄図を偲んで七古一首を作り、白河の関を越えたのが五月五日といわれるから、彼が柳津に来遊し岡本坊に止宿したのは四月末か五月はじめのことであろう。

三樹三郎はいったん会津入りした後、新潟に遊び、さらに会津に来遊したといわれるが、彼は山紫水明のこの柳津の地にどんなにか心を洗われたであろう。岡本坊に即賦の書を呈している。次の七言絶句である。

北州名勝是禅関　　北州の名勝　是れ禅関
寺在巉厳万畳湾　　寺は在りて巉厳万畳の湾（寺は巉厳に在りて）
夜枕夢清連岸水　　夜枕夢清くして岸水に連り
暮鐘声落半空山　　暮の鐘声は半空山にぞ落つる

柳津宿岡本坊即賦呈主僧云謝

鴨崖　頼醇

霊域虚空蔵尊をいろどる只見の清流、紫にけぶる飯谷山と暮の鐘声に旅の心を洗う三樹三郎の姿、それが今、吾人にひたひたとせまってくる思いである。この書は現在月本ハル氏（旅館）に所蔵されているが、詩・書ともに若くして一家を格した勤王の志士三樹三郎の真跡として、永く文化財として保有したいものである。

明治四十一年四月に会津若松市及び各郡の有志は相謀って寄付金を募り、この詩文といわれ、三樹三郎の徳を讃えて石に刻し、永遠

の碑文として円蔵寺境内の一隅に建立した。選文は旧会津藩士で東京高等師範学校教授でもあった碩儒南摩綱紀によるもので、この年八十六歳、翌年八十七歳を以て没している。書は三樹三郎と旧交のあった馬島瑞園（年八十四歳）である。

(五)　古川古松軒と東遊雑記

天明八年（一七八八）には、幕府巡見使の藤沢要人らに随行した古川古松軒が当柳津を訪れている。古川古松軒（一七二六～一七八〇）は備中国（岡山県）岡田藩の人で名は正辰、字（あざな）は子曜、通称は平次兵衛、古松軒はその号である。他に黄微山人、竹享とも号した。家は代々薬種業を営むとともに、古松軒自らはかたわらに医術をも施したといわれるが、彼の偉大さは、年少より地理学を好み、機会さえあれば日本各地を旅行してその足跡を全国に及ぼしたことにあるといえる。その旅行の代表的著述が『西遊雑記』及び『東遊雑記』の二巻であり、彼が天明八年に柳津をみて、東遊雑記に叙したのは次の如くであった。

「河沼郡柳津は、大抵の町なり。会津若松を出でしよりこの方の所なり。円蔵寺という禅院あり。七間四面の堂、荘厳巍然として能き寺なり。伝えいう。大同二年坂上田村丸建立なりしに、たびたび回禄ありて退転せしを、豊臣秀次公御朱印を賜わりて、慶長年中再建ありしを、ゆえありてまた衰えしを、若松の御城主左中将源正之朝臣は台徳院殿の御三男にして、保科家を継ぎ給いしにより、二百石の寺領を寄付ありて、今の如く御建立ありしなり。宝物数多あり、悉く拝見す。御花園院御宸翰、定家卿の小倉色紙、牧渓画、顔輝の画など出る。　（中　略）

さて円蔵寺は景色よき所なり、滝川山間より流れ落つる勢い恐しく、数丈の岩石流れを覆い、両岸の岸に獅子石・象石などというさまざまの奇石立ち並びたり。川は大河にて舟往来す、もし誤りて岩石に当れば、忽ち破裂して人命を魚腹に入葬する誠に危うき滝川なり。さてこの辺よりようよう山路を離れ、道広く歩行容易となりぬ」

古松軒にとっても、円蔵寺や虚空蔵堂は、「壮厳巍然として能き寺」であり、「景色よき所」と映じたのであるが、只見川の急流にはおどろいたらしく、「誠に危うき滝川なり」と肝を冷やすような記述ぶりである。この古松軒がみた円蔵寺は天明八年のことであるから現存する円蔵寺のことではなく、崖下の平坦地、小川家裏にあった円蔵寺のことである。虚空蔵堂（菊光堂）も現在のは文政十二年（一八二九）の再建であるからむろんそれ以前の虚空蔵堂をさしているわけである。

(六)　森命教作謡曲柳津

虚空蔵信仰の深さを表わす芸術作品のひとつとして、森命教作の謡曲『柳津』がある。その内容は柳津の福満虚空蔵菩薩を信仰する伊勢の国の僧がはるばる行脚して常陸国村松の大満虚空蔵を秋方に参詣してのちに、冬は若松で立越し、春半ばに若松を立ち出でて福満虚空蔵菩薩を参詣し、柳津の里人三人（実は仏のかりの姿）より

福満虚空蔵菩薩の開基来由の次第を聞かされ、さらに尊いお姿を現わされたのをふしおがみ、いよいよ信心を深くするというたどりで結びとなるものである。

森　命教作

柳　津　（観世流唱　省略）

（次第柔）願ひの糸を柳津に〳〵。誓ひを懸て参らん。（ワキ詞）是は伊勢の國より出たる僧にて候。扨も我國清澄能満虚空蔵菩薩と常陸の國村松大満虚空蔵。又陸奥會津にて柳津福満虚空蔵菩薩とは。同木同作の由承及候程に。去年の秋村松へ参詣申。冬に成會津若松へ立越候ひて。彼方此方一見仕て候。頃しも春も半に成候へは。今日は柳津へ参らばやと思ひ候。

若松の森を後ろに見なしつつ。朝日の影も直違の。橋打渡り程もなく。駒のいな鳴柳橋。湯川を過て行程に。所の名さへ高瀬河。吉六塚や榎檀。高久名に逢會津川。舟より上り細工名の。地蔵堂よとふし拝み。鶴沼川の橋の上。見渡す台の宮坂の。坂下の宿に着しかば。（下歌）海人の焼藻にあらねども。立居の人のしほとなる。土産にせん帰るさに。（上歌）求めたく社煙草〳〵。露の命をかけまくも。塔寺里の観世音。豊ならひに八幡の。社を拝み過行ば。家居續きて気多の宮。神はありともしらなくに。七おり坂をおりゆけは。朝たち来ても日の影は。早夕ごゑに程近く。三深を過て音に聞。柳津山の麓なる岩坂に。早く着にけり〳〵。（ワキ詞）急候程に、漸々着て候。暫此邊に休ひ、此處の事ども委く尋ばやと思ひ候。（一セイ三人剛）只見川。漕来る舟は此山に。歩をはこふ衆生なり。

（ツレ二人）魚ふちにおどる夕日影。誠妙なる氣色哉。（シテサシ）夫柳津は香集世界をかたどり。後には惟石巌々として絶戴雲に續き。（三人）前には原泉混々として金花の流れかって盡す。古城のかきへ五重の塔。明星石、寶珠石。三花の珠樹も森々たり。（下歌）一度も歩をはこふ輩は。（上歌）現世未来の其うちに〳〵。無量壽福の寶を得。一期生の後にはやく下退天の位に至る。かかる様も有明の月も隈なき誓ひ哉〳〵。（ワキ詞）我柳津へ参り。山川の致景を眺め。所の者を相待處に。里人三人来れり。いかに翁、おことは此處の人か。（シテ詞）さん候。此山の者にて候。扨御身は何くよりの御参詣にて候ぞ。（ワキ詞）是は伊勢の國より出たる僧にて候が。始て當山へ参りて候。先々當寺の御来歴、委く語て御聞せ候へ。（シテ詞）抑當寺円蔵寺と申者。延暦廿三年桓武天皇の御宇に當て。弘法大師入唐有しに。本朝佛法流布の為。大唐より三鈷と愛樹の木を日本の地へ投させ給ひしが。三鈷は紀州南山の松に懸りて今高野山に留る。愛樹は熊野の浦に漂ひ関東房州の天野に来る。大師帰朝して諸國修行の折節。此木を取上切て三ツになし。大木を以て尊客を彫給ふ。今清澄の虚空蔵菩薩なり。又中木を以彫給ふは村松の尊客也。末木は何と思召候か。再ひ海中へ観念して投入給ふ。斯て日数を経て常州柳河へ流れ来り。三来の柳の木に巻かかり。留まること一七日なり。夫より其所を七日巻と申とかや。所謂愛樹は柏の木也。其時何くともしらす釣人二人きたり。其木を取上て大師に捧け奉る。元より加

持し置給へる木なれば。尊客を刻まんと思召有といへども。彼所建立の地にあらずとて。是を荷はせて柳津へ来り給ひ。此處大師の卜居に叶ひ。猶又柳にかかりし由縁を以て。則彫給ひし尊客なり。（ツレ二人）又二人の釣人は。丹生明神。龍蔵権現なり。（シテ詞）是に依両社を當寺の鎮守と敬ひし也。（ワキセル）謂れを聞は有難や。其折仏法帰依の御代とて。かかる不思議の有やらん。（シテ詞）中々の事。此山は國々霊地有といへども。二世安楽の夫のみか。人の願ひも山川も、猶萬歳とよばふなる。（ワキセル）声か松吹風迄も。（シテ上）涼しき厳による波の。（ワキ上）治る國の験を見せて。（シテ上）豊にすめる。（ワキ上）我等迄。（上詞）萬代を安く楽む御誓ひ〳〵。今ぞ瀬をかけまくも添なしや。此山の動かぬ験無量億の。御恵そ有難や。佛神は一切の禮を授け。猶頼め隔てなき。真如の玉は曇らしな〳〵。（ワキ詞）猶々柳津の貴き謂懇に御物語候へ。（クリ地）抑此柳津と申は人王五十一代、平城天皇の御宇に。空海の開闢（びゃく）にして。徳一師の御建立なり。（サシ）其頃弘法大師我朝に、三十三所御建立有しに。（同）虚空蔵の尊客は、清澄・村松・柳津にて。是日本三虚空蔵と申也。（シテ上）中にも柳津は、（同）誠に霊験あらたにして。其の一なるとかや。（クセ下）徳一大師此山におゐて。護摩を修し給へは。忽ち紫雲たなびき。天より明星あまくたり。白地に乗て影向有。徳一是を禮拝し。其御形ちを見給ふに。御長二十五由旬にして。赫々たる大光明を放ちたり。あたりまばゆく見へ給ふ。其時の御跡とて。石に印も有けりと。語れば僧は不思議そと。御身如何成人により。斯委しくは知給ふ。御名を名乗り給へかし。（シテ上）今は何をかつつむへき。我は此山山神（ノ）に使へ申翁なり。はや夕月も程近く。終夜舞楽を奏すへし。暫（しばら）く爰に待給へと。岩陰によると見へて。行衛も知す成にけり〳〵。（地上）月陰の、清く照そふ如意の寶珠の。（ツレ二人）乙女の袖もあらはなり。（上同）不思議や内陣の斗帳を上て〳〵。立出給ふ御姿。誠にあらたに見へ給ふ。（後シテ上）抑是は御山に住て。王法を守り。國を治め。衆生を恵む虚空蔵也。（上同）其時虚空に音楽聞え〳〵。霊香薫じて花ふりぬ。天燈龍灯空に満て。丹生明神龍蔵権現。大黒尊天。賓頭盧尊者各顕れ舞給ふ。（シテ上）神佛水波の隔なく〳〵。福壽円満。現世無比楽。後世清浄土。衆生を守らんと舞給ひしか。舞楽も今は時移れは。信者は感涙肝にめいし。御暇申て帰らんとすれば。夜もしらしらと明かたの。夜もしらしらと明かたの。山風動かぬ御代こそ目出度けれ。（『若松市史・下巻』）。

第二節　奥之院の創立と弁天堂

(一)　奥之院の創立と弁天堂

奥之院の名称は霊厳山円蔵寺が釈徳一によって大同二年（八〇七）に法相宗として建寺された際に、礼拝の対象として奥行を持たせるためにこの寺院を建立したことに由来するといわれ、旧宗法相宗として開基された寺院である。従って円蔵寺と共に釈徳一の手になる由緒ある寺院でその歴史は古く、法燈八〇六年間の伝統を有し、そ

の間の変遷は主寺・円蔵寺に従い数おおく物語られているが、今その概略をのべてみる。

大同二年（八〇七）に会津の僧徳一は会津各地に多くの仏寺を建立したが、その一つが日本三虚空蔵の一たる福満虚空蔵を本尊とする霊厳山円蔵寺である。この円蔵寺の開基と同時に造立された奥之院は山号を松沢山と号し、本尊は明星天子を安置し、その位置は円蔵寺の東方にあたる小高い丘陵上にあり、柳津町内の主要部を展望できる地形上の要点を占めている。このように奥之院の開基は一説にいう柳津三十六坊の各寺建立による円蔵寺の勢威のなかでも、各寺坊中最も古い歴史を有するのみでなく、前述のように特に礼拝の対象に奥行を持たせるという意味が存在したから、他の円蔵寺附属寺坊とは格別異った立場にあったことはその地形上の要点からみても想像にかたくない。

このように法相宗寺院として創建された奥之院は南北朝末期の至徳二年（一三八五）に至り臨済宗に改宗した。これは当時の円蔵寺の別当であった義乗が一説によると寺内の紊乱を歎きこれを収めんとして、黒川（現在の若松）興徳寺の大圭和尚に嗣法し、法相宗たる円蔵寺を改宗されたのに奥之院は従ったためである。加えて此時より奥之院は始祖大圭和尚の開山をまつると共に、大圭和尚以後の歴代円蔵寺住職の退穏寺（隠居寺）たる性格を具えるに至った。

其後再び法相宗、又は真言密宗等にされたが、寛永四年（一六二七）再度臨済宗に戻り妙心寺派に属するなど、時の政情・人心に基いて転変を極めたが、いずれも主寺円蔵寺と軌を共にし、漸々明治中葉に至り、円蔵寺より独立して檀那寺となり一寺を形成することになり今に及んでいる。

この間柳津には数度をこす火災が発生したから、奥之院の罹災も当然考えられるところであるが、現在比較的史実として推測できるのは、寛文二年（一六六二）門前町大火、天和三年（一六八三）奥之院再建（いずれも円蔵寺所蔵、楊津秘録による）の記述により関連づけたものとして、此時奥之院が罹災し且再建されたことである。其の他については現在のところ不明である。尚奥之院の重要地を占める重要文化財「弁天堂」は室町中期の建立とされ、奥之院の沿革に重要な一頁をかざるがこれについては後述しよう。

柳津十二景（又は柳津八景）の一景たる「奥之院の晩鐘」は、

奥山の御法のにはのさびしさも
想いやらるる入相の鐘
花園待従公熙朝臣

と歌われているように、古来より郷人行客をして山境の静寂さをしみじみと味わわせるに足るものがあった。因みに現今の鐘は明治二十六年に菊光堂正面に石階十余級を積みあげて鐘楼を造立し大鐘を鋳造した際に、その余金を以って鋳造したものである。菊光堂の鐘は惜しくも太平洋戦争に供出されたが、幸いにして奥之院の鐘はその危を免がれ、現在もその名残を止めて朝夕安らぎを感じ、余韻を郷人に伝えている。

奥之院の後裏にある有名な「八汐の紅葉」（別名「七色紅葉」ともいう）は樹令八百年と称され、奥之院の歴史を物語るにふさわしい樹容をもつ紅葉である。この紅葉は四季に八度、葉色の変化を示す珍らしい大樹で、弁天堂の人工美とならんでひとしお風致に風情をそえ、地人行人の目を楽しませる名木である。

(二)　弁天堂（その建立年代と変遷）

重要文化財「奥之院弁天堂」は室町期の禅宗様の代表的地方建築物でわが柳津にとっても貴重な文化遺産であるが、建立年代は明確さを欠き、室町中期・末期のいずれかを建立年代にするかについては諸説が存する。しかしこのことは建築物の歴史性と建築美とを根本的に否定するものではない。

大正十四年四月五日付、文部省告示第七一号によって、奥之院弁天堂は古社寺保存法第四条による特別保護建造物に指定されている。それによると、

名　称

奥之院弁天堂

指定解説

奥之院弁天堂　臨済宗

寺伝大同二年草創、応永ノ初年大圭和尚再建ト称ス。規模小ナレドモ室町時代中期ノ初メニ於ケル禅宗様ノ形式ヲ示シ、絵様繰形甚ダ雄渾奇抜ナリ。寺伝応永年間ノ再興ト称スル者信ズルニ足ルベシ。

とあり、室町中期応永年間建立説を是認しているようである。これに対して、昭和三十四年の奥之院弁天堂解体修理工事を担当した施行者は之に疑問を持ち、次のように述べている。

「弁天堂は奥之院境内の入口正面、最重要の地に位置している。弁天堂がいつ頃より営まれたか詳かでないが、建物下地盤地表より九寸深さのところ（礫土層の表面）に焼炭・木炭層が発見されるので、かなり早くから現在地に建物のあったことが知られ、また建物下地表に露出して焼損を受けた礎石が二個みられるので、その後も引続いて建物のあったことが確認される。桃山期頃の境内古図（この点は後述する）の現在地に、宝形造の建物がみられるが、これは露出する焼損を受けた礎石に該当するものとみられ名称の記載はないが、おそらく弁天堂ではなかったかと推察される。

現在の弁天堂は建立時代が応永頃と伝えられるが、形式的に禅宗様がかなりくずれ、細部の絵様・繰形等も濃厚に地方色を示しているので、室町も末期に近いのではないかと考えられる。云々」

（『昭三四・一二・二五重要文化財奥之院弁天堂修理工事報告書』傍点は筆者が記入）

とあって、建立年代は不詳としながらも現存建築物の作風は室町末期近いものと推測している。

桃山期頃の境内古図とは、会津若松市・斎藤伍吉氏蔵の柳津町の姿を円蔵寺中心に描いた絵図であって、製作年代は不明であるが、人物の服装等よりして桃山時代のものとみなされているものである。この古図にみられる弁天堂は宝形造であったことが判明するが、其の後弁天堂の移築解体により、江戸初期の境内古図にみられるような形式を具有し、昭和三十四年修理前の様風を今に伝えてきたものと考えられる。（江戸初期の古図とは円蔵寺蔵のもので、右下に「住持小比丘宗忍記焉」の記がある。宗忍は泰州和尚寛文三年～貞享二年の円蔵寺住職のことであるから、この図は江戸初期の古図と推定し得る。）

この移築については寺伝により推測し得るものではあったが、昭和三十四年の修理の際に、当初材が軸組材に至るまで打替えの釘穴が一本あることが発見されており、過去に一度解体を受けたことが判明したこと。建物の方位の旧番付が現在の方位にあわず、また現在地が旧番付の方位にあい難い地形にあること、などの点からみて事実上移築されたものであることが明らかになった。その時期はいつごろであるかは不明であるが、軸部上方の当初彩色期より遡り、その当初彩色時期は宝暦年間（一七五一～一七六三）より更に遡ることよりみて、別論もあるが江戸初期とみなすのが妥当といえよう。

この考えは、

① 見え掛り側の正面及び東側面の頭貫にはかって鯉金具が打たれたが、それは当建物が弁天堂とされた時、即ち移築の際に始めて打たれ、軸部上方に張板して彩色された折にじゃまになり取りはずされたものであり、したがって移築時期は当初彩色時期より古い時期であること。

② 軸部上方の彩色は張板の上に画かれているが、その張板に新旧あり、古いものには三種の番付、新しいものには番付がなくて宝暦の年号と当時の住職祚秀の人名がみられ、当初彩色は宝暦年間よりかなり以前に行われたこと。

をもとにしているのである。又天和三年奥之院再建、宗忍筆江戸初期古図からも同様のことがうかがえよう。

次に弁天堂の移築期以後の変遷をたどると大要左の通りである。

。江戸時代初期移築と大改造を行う。

① 見え隠れ側の西側面及び背面の基壇は略式とし、同側の縁をとりさり、出入口を封鎖し、背面の張出し仏壇もとりさった。

② 正面中央間の扉内側に上部連子、下部縦板壁を設けて、礼拝に便ならしめた。

③ 見え掛り側の正面及び東側面の貫頭に墨を塗って化粧させ頭貫に鯉金具を打って弁天堂とした。

④ 来迎壁とその前の須弥壇をとりさって、中央間背面壁に接して仏壇を構え、造り付けの厨子を設けた。

⑤ 正・側面の窓を火灯窓より袖壁付の窓に改めた。

⑥ 軒の反りを少くし、種数も六支掛より増し、各部材の形式

を江戸様式に改めた。

- 宝暦以前　（年不詳）当初の彩色をほどこす。
- 享保二十年　（一七三五）大巾の修理を行う。
- 宝暦三年　（一七五三）大掛りな彩色補修をほどこす。
  仏壇の両脇の間への拡張。
- 天保十五年　（一八四四）屋根葺替を行う。
- 大正五年　（一九一六）屋根葺替を行う。
- 昭和三年　（一九二八）屋根葺替を行う。
- 昭和二十一年（一九四六）屋根葺替を行う。

移築後の改造はそのいずれの時期に行われたか皆目不明であるが概ねは享保二十年（一七三五）の大修理の際と推定される。以下移築後の改造個所を列記する。

一、正面及び東側面（見え掛り面）の縁の位置を揚げ、その形式を箱造りものに改め、下の基壇石積を葛石状の石を載せて一段高めた。

二、残存する正面及び東側中央間の扉装置を、正面を蔀戸、東側面を腰高障子の引違戸装置に改めた。同時に正面扉内の上部連子、下部縦板壁もとりはらわれた。

三、西側面の窓を封鎖して、正面の窓の袖壁をとり払って格子窓とした。

四、後中央間の仏壇を両脇の間まで拡げ、二段造りとし、従来の造り付け厨子を置厨子に改めた。この折本尊も新調された。

五、軸部上方及び内陣の彩色を行った。

以上が移築後の主な改造点であるが、この外屋根替・小修理等は随時行われたであろうことは想像にかたくない。昭和三十四年の修理に際し、左記のような棟札及び銘文が発見されており、弁天堂改修の歴史をうかがうことができる。

一　享保修理棟札

「銘文」　　棟梁　内海　鴨左衛門

維時享保二十八月如意乙卯日以於大小　同　星　幸　助

檀越資助力大弁財尊天宝殿一守悉　内　海　鴨　平

奉修補之者也仰希依此修善力大小檀那　木挽　二　瓶　儀兵衛

現当二世諸願満足矣而院門鎮世中外　同　三富　弥五兵衛

安穏檀那信帰崇諸縁吉利矣　越後国　ヒリ村

前住当山縁住興徳四十四世閑居臨川菴主鼎宗徒

奥之院現住　禅恕謹誌

二　棟木墨書

「銘文……表　同……裏

享保二十年　大正五年

禅恕首座修補　旧八月弐拾五日

至天保十五甲辰

百十年　　奥之院
今甲辰五月　　住職　小　林
屋祢□
□
五十三世　　屋根方
□　　坂本村大沢
屋彌方　　藤　田　直　八
小治□　　倉入村郷戸新村
寺中　　鈴　木　徳　次
長太良　　大沼郡原谷村滝谷
□善　吉　　目　黒　久　松

三　北（背）西西脇の間壁板墨書
永禄八年五月廿□
備考　この間はもと張り出し脇仏壇のあった個所なので壁板は後に他の間のものを移動して、ここに張ったものと思われる。

四　南（正）面中央間頭貫の彩色張板墨書
宝暦三酉五月三日成

奥之院弁天堂解体修理　以上のような幾多の変遷と改修とをみた弁天堂は昭和三十三年に至り、各部の破損が甚しいため根本修理をなす必要が生じたので、奥之院弁天堂修理工事委員会を構成してこの作業に着手し、昭和三十四年十二月三十一日にその竣工をみた。この現場工事監督には文部技官、佐藤登氏、現場主任には、藤島清太郎氏が当り、解体修理の実作業を指導したものであるが、単に解体修理に止まらず、あわせて資料による復元、美観上の整備を行ったことにその特徴を見出すことができる。以下その工事概要を記してみる。

着　工　昭和三十三年十二月一日
竣　工　昭和三十四年十二月三十一日
総工費　金三百七十五万八千二百四十六円
　　内、国庫補助　二百五十二万円

修理の大要
①解体の際は、慎重な調査を行い、その要所は精細に写真撮影または記録をなした。
②基礎工事前に縦横にトレンチを掘り、前身堂の調査を行った。
③木工事はできるだけ当初材を再用し、取替材も極力旧材と同種・同質のものとした。また構造手法は勿論、工法も台鉋、丸釘使用等の外は在来のそれに倣った。
④基礎は栗石コンクリート地業とし、礎石は全部据え直した。
⑤屋根は長年月風雨に耐えられるよう特に葺材を吟味し、入念に施行した。
⑥木部の古色は、戸口まわりを特にトーチランプによる焼成仕

上げとした。

建築様式の変更要点

①廻縁を整えた。

②柱間装置を次のように復した。

㋑来迎壁西脇海老虹梁下の小壁及び繋虹梁を撤去した。

㋺正面中央間の嵌殺戸（下部板戸、上部格子戸を撤去し、両開桟唐戸装置に改めた。

㋩正面両脇間の連字窓を花頭窓・内部引分板戸に改めた。

㋥両側面中央間の東側引違戸、西側羽目板をいずれも両開桟唐戸装置に改めた。

㋭両側面前端間の東側窓、西側羽目板をいずれも花頭窓・内部引分板戸に改めた。

㋬背面中央間の羽目板を撤去し、両開桟唐戸装置に改めた。

③来迎柱筋より後方の仏壇を撤去した。

④来迎壁を復し、その前方に須弥壇を設けた。

⑤背面に張出しの脇仏壇を設けた。

⑥棰の支割と桁の上端反りを旧に復し、茅負・隅木の反りを整えた。

⑦屋根の勾配を八寸にし、櫓煙出型棟を露盤宝珠に改めた。

弁天堂の建築様法と安置仏　以上述べて来た如く、弁天堂の創立年代は建物の形式・技法よりみて、至徳二年（一三八五）臨済宗に改宗後間もない応永年間とは言い難く、それより稍下った室町末期近くとみるのが、佐藤登氏の推論である。この修理工事によって江戸初期に移築された弁天堂の建築作風は概ね当初の形に復元されたことになる。室町期における典型的な禅宗風の単層堂であり、方三間の小堂ではあるが、細部の手法に目をみはるものがあり、殊に絵様・彫刻に優れている。安置仏は弁財天とされているが、髪形・衣装・印相・持物等からみて吉祥薬師の類とみられ、製作年代は衣文等より江戸中期頃とするのが佐藤氏らの見解である。

堂縁に、天女ありけり　朧月　　芳月

第三節　観光地理と柳津

一、序　説

(一)柳津の風景

古来柳津は風景に恵まれ、人々の心を引きつけ、来遊するものに魅力を感じさせたと思われる。今は湛水して湖水化した風景であるが、それ以前には只見川の渕・瀬・奔流があり、更に奇石・怪石等変化に富んだ流路を筏流しの悠然たる情緒、沿岸には楊柳の大木が繁り、特有な景観が見られたものである。支流においては火山岩を深く侵蝕し懸谷をなして見事な滝が懸っている。

この風景に禅宗を中心とした宗教上の文化景観がよく調和しており、古今の詩情をそそり、幾多の詩歌を生んでいる。

柳津を詠んだ詩歌集

◇伏見宮文秀女王殿下御詠歌

流れての世にもたへせじ只見川
　ただみ佛の深きちかひは
円(まど)かにも蔵る月の影見れば
　こころにさわぐうき雲もなし

◇頼鴨厓の詩　　弘化三年宿柳津

北州名勝是禅関　寺在巉巖万畳湾
夜枕夢清連岸水　暮鐘聲落半空山

◇芭焦碑　　もと魚渕に現在円蔵寺境内

川上やこのかわしもも月の友

◇大納言愛親卿

名のみきくよもぎの島をみちのくの
　やなぎ津と世の外にやあるらん
すなほなるみのりの風の吹なべり
　こち靡きくる柳津の里

◇新城杏所句碑

一舟を漕いで眼下のダムの秋

◇長谷川杜月句碑

魚渕の魚朱にまみれ崖紅葉

◇新井田忠穂句碑

千羽鶴ゆれて御堂の春明り

◇柳津十二景

・霊巌秋月……霊巌山の秋の月の冴え
　いつくしき岩ほの露に宿り来て
　影も世に似ぬ秋の夜の月
　（園中将基茂朝臣）

・戸原眺望……郷戸原の美しい段丘
　夕日さす戸原に通う山賤や
　こゆべき坂の道急ぐらん
　（梅小路正三位定肖卿）

・堂森春霞……円蔵寺を抱く堂森山
　松枝の梢も春は紅に
　匂うや花の霞むなるらん
　（唐橋右大弁在経卿）

・只見渡舟……渡舟は今はなし、その風情を想う

朝な夕なしづ心なく只見川
世のいとなみを渡る柴舟
（芭焦庵桃青）

・魚渕の清涼……清姫橋の夏の涼

魚渕にひれふる数も見ゆるまで
底ゆく水の色はすみけり
（桜井正三位供秀卿）

・飯谷初雪……飯谷山の初雪は冬の訪れ

今いく日ありて里にもふり積ん
飯谷の峯のけさの初雪
（姉公路少将公遂朝臣）

・巻村時雨……小巻の山に時雨けぶる

常盤にて色も変らぬ巻村は
時雨にのみや冬を知るらん
（中山侍従忠能朝臣）

・沼沢朝霧……沼沢の朝霧の静かな遠望

隔つべき朝の霧にこもり
沼深き心は顕はれにけり
（富小路左兵衛佐貞随朝臣）

・奥之院晩鐘……入相の鐘に佛都を感ず

奥山の御法のにはの淋しさも
思いやらるゝ入相の鐘
（花園侍従公燕朝臣）

・月光寺糸滝……春水に糸を干す風情あり

糸滝の滝の白糸よるよるは
月の光の影むすぶらん
（高陽山人）

・中之橋夕照……中橋の賑わいとその歴史

ひき渡る駒のあがきも急ぐ見ゆ
夕日照せり里の中橋
（中御門侍従資文）

・下田落雁……この風情今はなし、惜

詠めやるれ下田はるかに幾つらか
友うちつれて落る雁がね
（持明院少将藤原基延）

二、観光資源としての温泉

(一) 柳津温泉の観光型

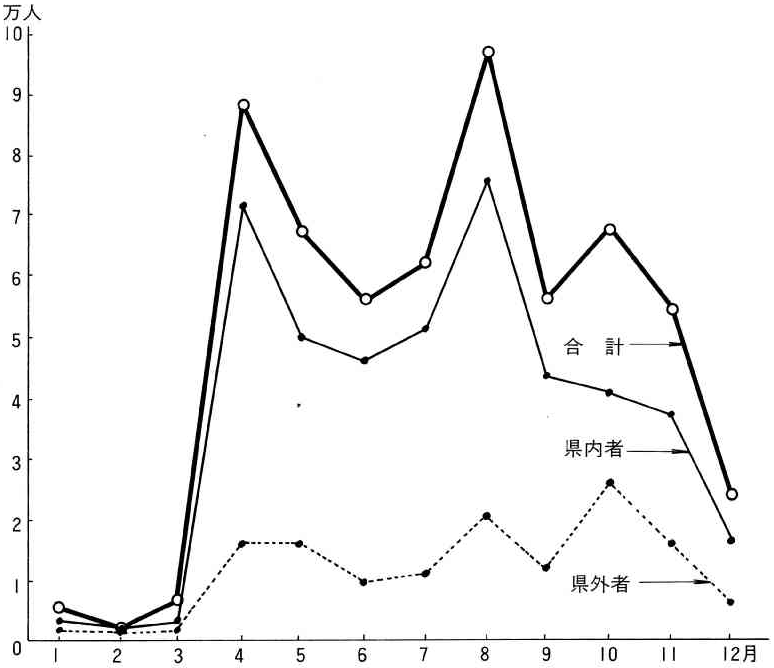
温泉の類型別から考察するに発生的には第一の療養型から第二の療養機能も残っているが観光機能の強い中間型、更に第三には療養機能が消滅した観光型に分類する場合、柳津温泉は第三の観光型の性格を持っている。温泉源も遠く西山温泉地より求め引湯して観光への促進策とした経過を辿っている。それで湯治客から発生した型式ではなく、直接観光客への需要に迫られた人工的施設であると見られる。

年次別観光者数(柳津町観光開発計画書による)

年　次	昭和42年	43	44	45	46	47	48	49
入込数	(4人)110	410	239	335	393	465	463	589.6
伸　率		372.7	58.3	140.0	117.0	118.0	99.6	132.0

年次別の観光者数の推移を見れば(上掲表)わかるように、昭和四十九年の五十八万九千人は、昭和四十四年の二十三万九千人の二・五倍近くなっている。それはここ三年間における、只見線の開通による新潟・東京・佐渡・善光寺等の観光圏の拡大となり、国道四十九号線の全線舗装完了、あるいは只見川・銀山川の嵩上げ工事に伴い町の景観が一変し近代的な旅館・ホテルの建設がそれを促進した結果と見られる。

更に月別観光客の状況から考察するに、十二月・一月・二月・三月の四か月間(冬季)は所謂冬眠状態になっているところに今後の開発の課題がある(右図参照)。



柳津温泉月別来訪状況(昭和49年・柳津町観光開発基本計画書による)

(二) 療養型としての西山温泉

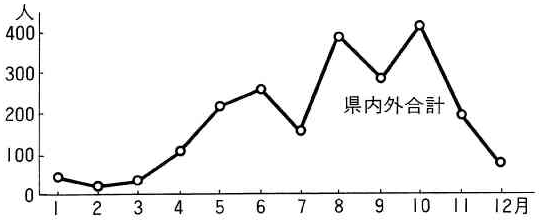
柳津温泉が観光型に対して、西山温泉は発生の初歩的な、療養型の域を脱しない。そこに特色があって、この両者の対象的な両極端地域が将来どうするかに温泉観光の課題がある。年度別の来訪者を

見ても昭和四十五年の一、一九〇人に対し、昭和四十五年の二、二〇二人で五年間で一・八五倍になっている。旅館の施設の収容力、温泉の湧出量に比較して、きわめて来訪者が少ない。

月別来訪者数を見るにやはり秋・夏の二期型で、冬眠状態の現象は柳津温泉と同様である。

西山温泉は湧出量多く温泉収容力の九五〇人相当に対し二〇〇人の収容力であるので二十一パーセントにとどまってほとんど未利用に近い状態になっている（前掲観光開発基本計画書）。

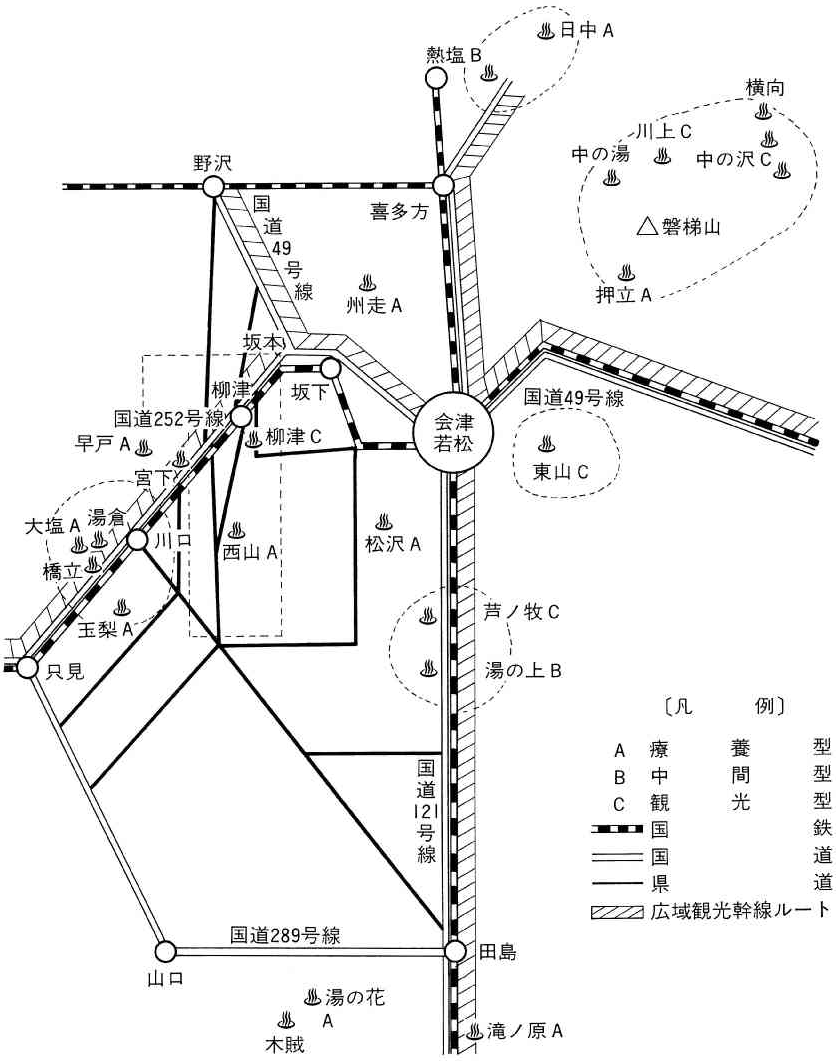
こうした将来の開発に対しては、県道柳津・小野川線の改良整備と博士山の開発、温泉利用の医療施設等の対策が望まれている。



西山温泉月別来訪状況（昭和49年・柳津町観光開発基本計画書による）

《西山温泉の主治効果》

神経痛　リウマチ　皮膚病
胃腸病　ゼンソク　婦人病
眼病　痔



会津の温泉と交通網図（柳津町観光開発計画書による）

三、観光資源としての自然景

(一) 恵まれた自然環境

本町の観光レクリエーション資源は、自然環境そのものが舞台をなしている。その自然環境は豊富な観光資源に恵まれてきれいな空気、澄んだ水、山野の緑、変化に富んだ風景等将来有望なる観光開発地となっている。

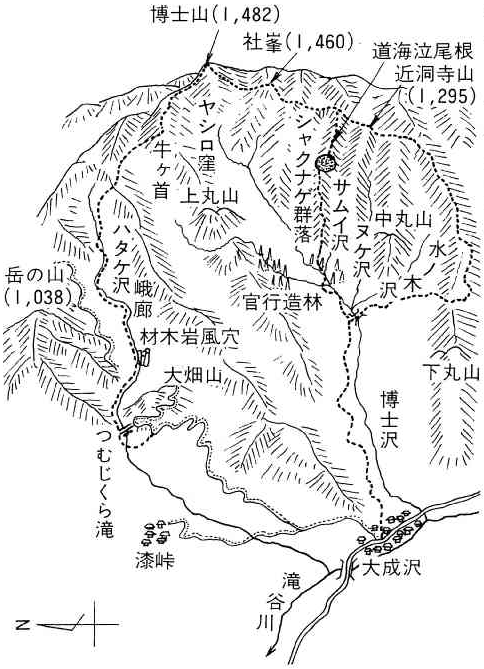
(二) 山　岳

本町の山岳の中で博士山（一、四八二・〇メートル）、志津倉山（一、二〇三・〇メートル）、明神ケ嶽（一、〇七四・二メートル）は標高一、〇〇〇メートル以上を有して登山利用の対象地となっている。特に博士山においては原生林や石楠花の群落、あるいな御神楽岳・明神ケ嶽と共に古代における伊佐須美神社の遷座の伝説等ゆかりの山岳であって今も御社跡があり、そうした伝説を裏付ける霊山でもあり、年々登山者が増加している。最近はあらたに、ツムジクラ滝を結ぶ登山道・林道等の開発によって脚光を浴びつつある。

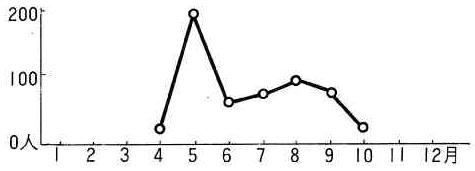
それと共に原生林の保護については今後の問題として考慮しなければならない。南方のこの三山は軽い登山コースとして観光上の価値が充分考えられる。この頂上の眺望は又格別で、西には御神楽岳浅草岳、東北方には磐梯山・吾妻の連峰、北方には飯豊山があり、眼下に会津盆地が開けている。更に南方遥かに那須の連峰が遠く噴煙をあげているのが見られる。

博士山の登山利用は五月をピークとして七か月にわたり、その利用者は年間（昭和四十八年）六一〇人程度でまことに淋しいものがあり、柳津の観光事業に対してあまり影響を与えていない状態であるが、公民館・地元部落の積極的な宣伝と施策により年々増加の一途を続けている。この方面の開発は今後の課題として高く評価すべきである。

又中位の標高の飯谷山・大平山・湯の岳・猿倉岳等は温泉地に近いのでスキー場やハイキングコース、あるいは都会の人々の遊楽的場所として利用価値が高い。



博士山登山コース図



博士山入込数図（昭和47年・柳津町観光開発基本計画書による）

(三) 渓谷

ツムジクラ滝は滝谷川の支流南沢の中流の硬い安山岩によって二段になり、上滝は落差二十五メートル、下滝は六十メートルあり、水量が豊富で四季それぞれに見事な景観を呈している。最近峯越林道の開発によって滝の全容がこの林道の展望台から見る風景は一大壮観である。更にこの滝の上流には柱状節理の見事な岩壁が露出し、あるいは太古よりの太い「マタタビ」特有な植物の群落などがある。河底に露出した峨廊や滝・瀬等秘境の感がある。

更に大成沢・芋小屋附近約二キロメートルに及ぶ滝谷川の一帯は不動滝をはじめ十個に近い滝の連続で一大瀑布群をなし、床の岩盤には甌穴などの地形が見られる。成沢の地名も滝のごうごう鳴る所謂「ナリサワ」「ナラサワ」等の語感から来る関連性があるではあるまいか。

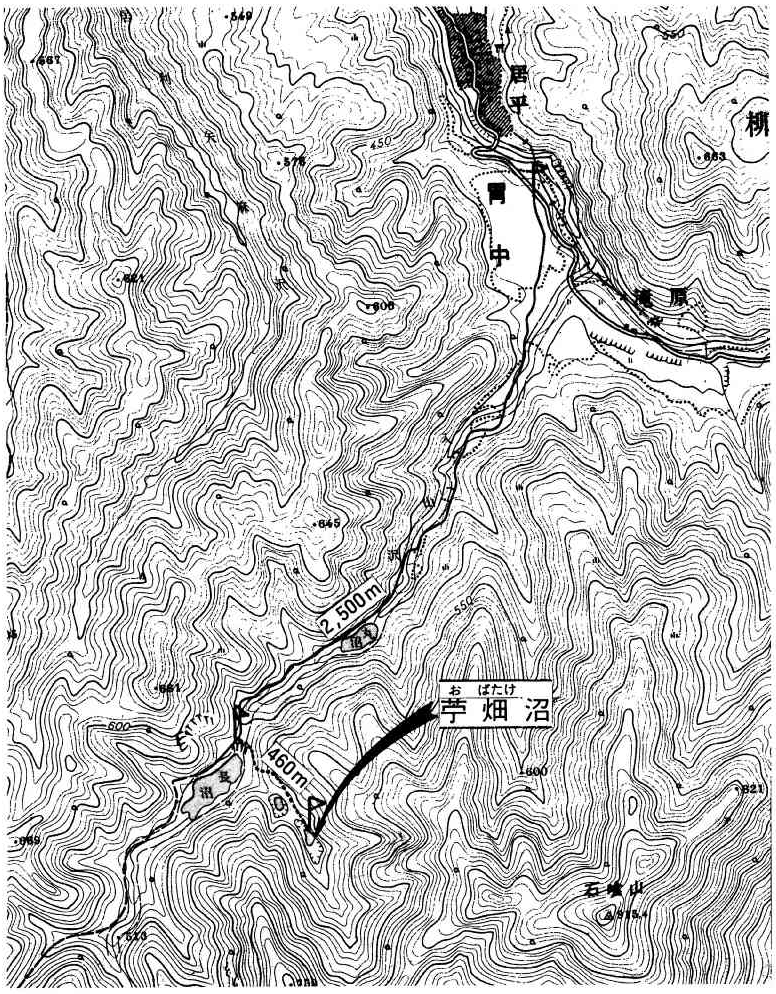
自然系観光レクリエーション資源一覧表

		名称	内容	特性
自然系資源	山岳	博士山	標高 1,482.0 m	登山コース設定、しゃくなげ群生、原生林
		志津倉山	〃 1,203.0 m	登山路、登山岩場
		明神ケ岳	〃 1,074.2 m	高田町境界、伊佐須美社跡
		猿倉岳	〃 907.0 m	岩場、スキー開発
		石喰山	〃 915.4 m	紅葉と岩場
		湯ノ岳	〃 729.3 m	西山温泉の近くにあり将来性あり
		飯谷山	〃 782.9 m	飯谷神社、頂上の眺望、小巻山スキー場
		大平山	〃 396.8 m	柳津温泉の東側、遊歩道
	河川	只見川		県立自然公園、風景、舟遊
		滝谷川		一部県立自然公園、つり、渓谷
	渓谷	つむじくら滝	落差 86 m	杉山川の上流峨廊、柱状節理、遊歩道
		糸滝	〃 15 m	春の融雪期水量、月光寺、遊歩道
		不動滝	〃 25 m	水量多し、胄中発電所附近
		大谷滝	〃 20 m	獅子おとし附近、布引状の景観
		滝谷川の瀑布群		大成沢、芋小屋附近は連続渓谷をなす
		上新田渓谷		東川の上新田渓谷と岩場
	温泉	柳津温泉	湧出量 135 l/mm	西山温泉より引湯
		西山温泉	〃 378 l/mm	湧出量豊富
	その他	魚淵	うぐい生息地	国指定天然記念食物（諏訪町）
		こぶし	樹齢700年	県指定天然記念食物（中野）
		七色楓	周り 2 m90cm	年間樹葉七変化する（奥之院）
		箒松	〃 4 m90cm	箒状の赤松（大野）
		種蒔桜	〃 7 m	古来種子蒔頃開花によりこの名あり（細越）
		枝垂五葉	〃〃 2 m50cm	松の枝が下方に垂れる樹性あり（円蔵寺）
		もりあお蛙	約600個の卵塊	おばたけ沼に群生する（胄中）
		雪椿	沢尻川中心に群生	雪椿の東限か

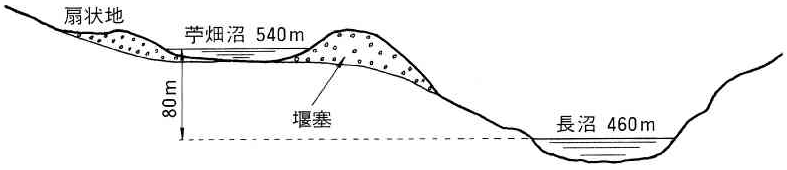
(四) モリアオガエル

胄中から入山沢の林道約二、五〇〇メートル奥へ入ると丸沼があり、更に周囲七〇〇メートルもある大きな長沼がある。そこから苧畑沢を約四六〇メートル上ると周囲二五〇メートル、標高五四〇メートルの苧畑沼があり六月中旬頃行って見ると賑やかにモリアオガエルが鳴いている。

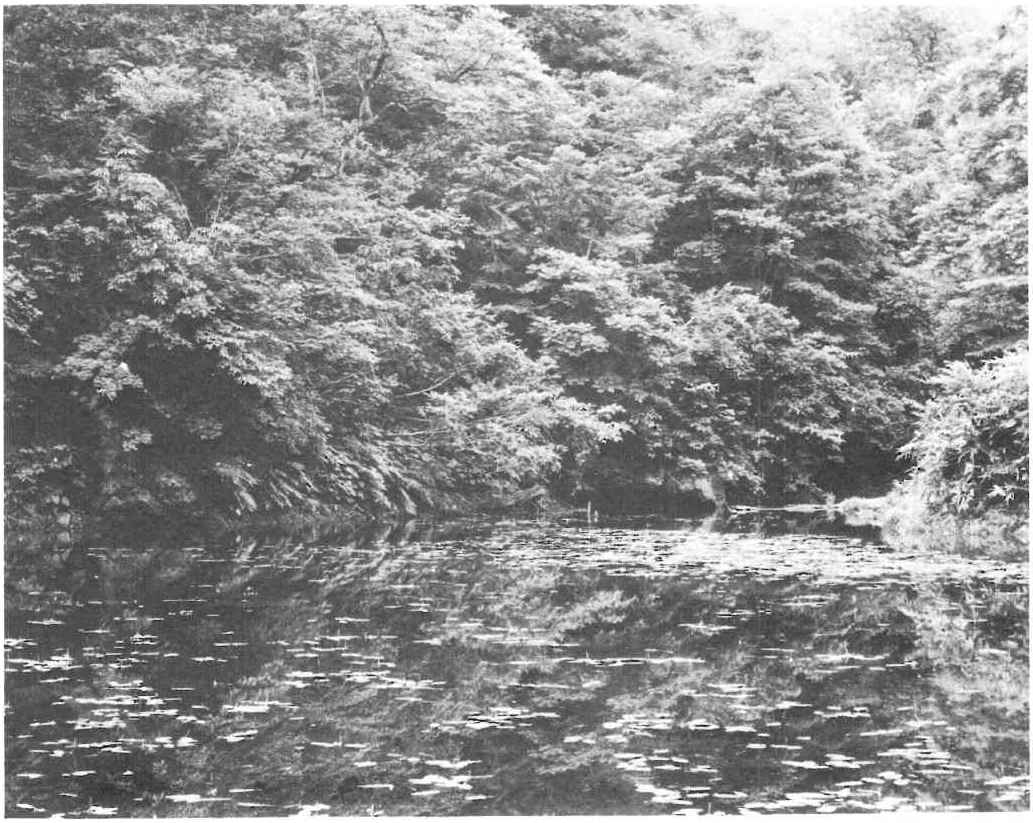
この沼は岩石が崩れて堰きとめられ、自然に出来た沼でモリアオガエルの生息条件に恵まれている。即ち、上流は小さな扇状地となり伏流水となって沼に注ぎ、下流も伏流水となって長沼に注いでいるので、天敵であるナマズやイモリの入るのを防いでいる状態である。又この沼の周囲は国有林となっているが営林署の理解によって七十町歩の伐採を中止しているので自然環境が保護されているので天然記念物の指定により是非保護しなければならない。古老の話によれば、かつて下流の長沼・丸沼にもモリアオガエルの生息を見たが、他の魚類の餌となり絶滅している。



苧畑沼位置図



苧畑沼と長沼との関係図



↑苧畑沼と樹林

→苧畑沼調査（蜂谷教授）

苧畑沼のモリアオガエルについて

福島県文化財専門委員　蜂谷　剛

苧畑沼は河沼郡柳津町胄中地内にある小沼で、山峡部をくずれた岩石がせきとめ、そこに水が貯ってできた沼である。南に鋭った三角形となり、長さは約七十八メートル、最も広いところで幅約四十メートル程ある。また水深は周縁は二十～三十センチメートル、最も深い所で約二メートルと推定される。

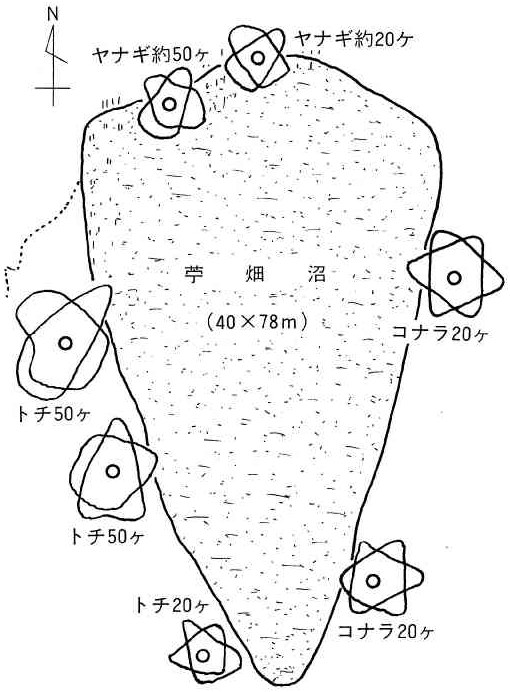
両岸の山はトチ・コナラなどを主とし、カツラの巨木などもまじる広葉・濶葉樹林がよく発達している。沼畔には樹齢五十年以上と推定されるヤナギ類も見られ、ヤマドリゼンマイ・イノデなど羊歯植物も多い。

苧畑沼には五月下旬から六月下旬にかけてモリアオガエルの卵塊が多数認められる。本調査は昭和四十九年七月一日に実施したが、調査時にはトチ・コナラ・ヤナギなど高木の樹枝間に一本平均二十個の卵塊を数えることができた。この他潅木の枝葉間、更に草叢間などでも多数の卵塊を認めることができた。調査時期は稍遅く、樹枝間の卵塊はすでに卵の発生も進み水面に落下する直前で、中には水面でとけかかっているものも認められた。調査時の推定卵塊数は約三五〇個であった。

福島県内には、モリアオガエルは各地に生息し、繁殖地も多数知られるが、苧畑沼は周縁の林がよく残され、他に見られない良好な環境を構成している。国の天然記念物に指定されている双葉郡川内村の平伏沼は現在周縁の森林は見事に切拂われ、年十五～二十個位の卵塊しか観察できない状況になっている。これに比べて苧畑沼は数及び繁殖環境共にはるかに秀れ、学術的価値が高いと考えられる。

従って文化財条例による指定により、充分保護されることが望ましい。

尚、指定に際しては周縁植物群落をも含めて考慮することが必要であり、また沼にはモリアオガエルの天敵であるサンショウウオ及びイモリの生息が確認されているので、これらの動物に対する人工的管理も同時に考えねばならない。



特に多くつく樹木の分布図(トチ・コナラ・ヤナギ)

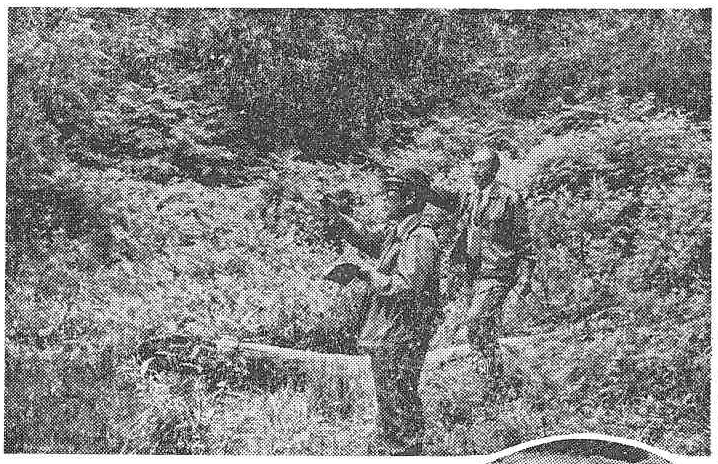
小畑沼（柳津）のモリアオガエル

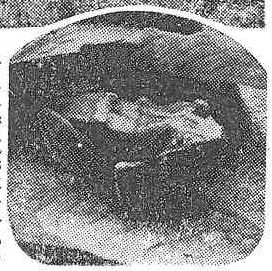
県天然記念物指定が有望

成育に絶好の環境

蜂谷福大教授らが調査

昨年夏、会津地方では珍しいモリアオガエルの生息地を発見した河沼郡柳津町教委（内田伊佐雄教育長）はこのほど福大蜂谷剛教授を招いて現地調査を行った。その結果、同教授は「国天然記念物指定の双葉郡川内村平伏沼のモリアオガエルに次ぐ大規模なもので、県天然記念物の有力候補」と太鼓判を押して帰った。町では同教授の調査結果がまとまり次第、新年度から設置した町文化財保護条例による町記念物に指定、保護する計画を進めている。





上は小畑沼のモリアオガエルの生態を調査する蜂谷教授㊤と内田教育長
下柳津町教委で試験飼育しているモリアオガエル

（川内村）平伏沼に次ぐ規模

モリアオガエルが生息しているのは柳津町の中心から滝谷川に沿って南へ約二十㌔離れた同町胃中字入山沢地内、通称小畑沼。周囲約三百㍍、水深一・三㍍。地元の人たちは「エビがよくとれる沼」としてよく出かけるが、昔ながらの自然がそのまま残されている。

蜂谷教授の調査によれば、産卵の最盛期はややすぎたがそれでも湖面におおいかぶさるヤナギ、トチ、ナラ、クリ、ヤマグワなどの立木の枝、葉にカエルが卵を産みつけた直径約十五㌢から二十㌢大の泡塊五百個が確認された。

昨年六月二十日町教委が調査したときは産卵の最盛期で内田教育長は一千五百個を数えたという。同教授の説明によると沼が谷間の底になっており、さらに周囲の樹木の枝が湖面近くまでおおいかぶさり、水量も豊富で産卵してオタマジャクシになって成長するのに最適の環境だという。

モリアオガエルは本州、四国、九州などの山地の限られた場所にすみ、毎年五月から八月ごろまでの間に沼や池の水面に突き出た樹上に泡塊をつくり、この中に産卵、オタマジャクシになって水面に落ちる変わった習性をもつカエル。県内では川内村平伏沼が有名だが、最近周囲の樹木が少なくなって沼の水がかれ、ひん死の状態にさらされている。

カエルの大敵は沼にすむイモリ。オタマジャクシになって水面に落ちたのを下で食べてしまうという。柳津町教委では、今後沼にいるイモリを駆除し、沼地一帯の環境を整備してカエルを増やす計画も考えている。

福島民報新聞（昭和49年7月16日）より抜萃

四、観光資源としての文化景

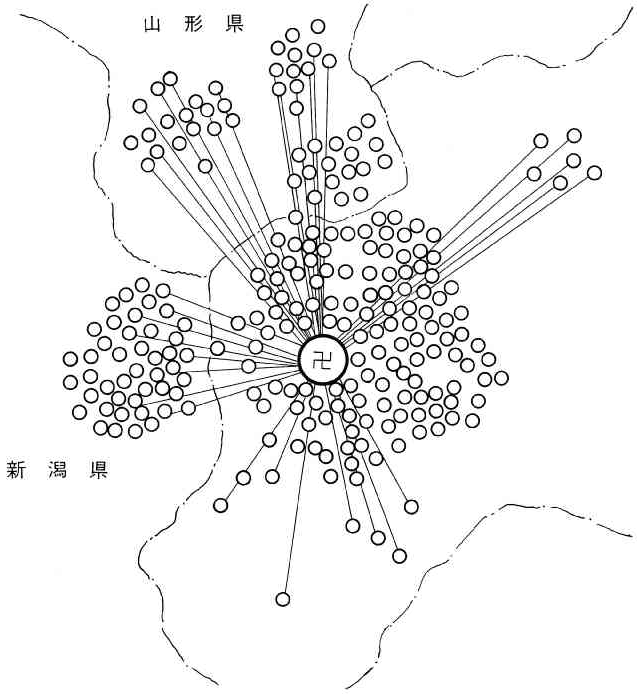
(一) 宗教的文化遺産

本町の観光資源の代表的なものは、福満虚空蔵尊を中心とする文化遺産である。古来よりその信仰圏は県内は勿論であるが、山形・新潟の両県の信仰特に厚く現在に及んでいる。特に日本三虚空蔵の一として全国的に肩をならべ、その伽藍の雄大さと、風景の勝れた点においては日本一を誇るに足る存在である。

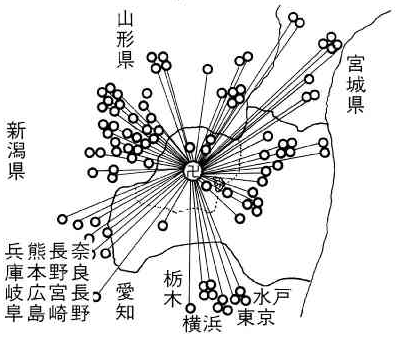
更に奥之院弁天堂は国の重要文化財に指定され、その唐様建築の美しさは観光客の足を止めるとともに、美術・建築分野の研究者の好資料として高く評価されている。

宗教的文化景観とともに、これに関係した年中行事は参拝客ばかりでなく将来の観光客誘致の資源として大きな役割を果している。その意味において民俗芸能・民俗行事に対する関心を高めこの保存と発展に努力しなければならない。

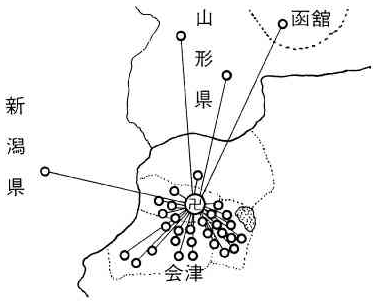
奥の院弁天堂(国重文)



信仰圏No.1　講中の分布図



信仰圏No. 3　参詣記念署名による分布図



信仰圏No. 2　円蔵寺献灯籠分布図

人文系観光レクリエーション資源一覧表

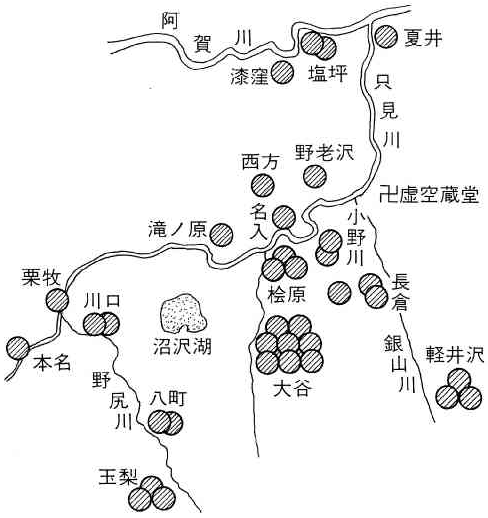
		名称	内容	特性
人文系資源	史跡	円蔵寺		大同2年徳一により創建された。
		福満虚空蔵尊		広い信仰圏を持っている。
		奥之院弁天堂		応永初年の唐様建築。
		釈迦堂		寝釈迦の像を安置す（奥之院）。
		猿戻城址		藤、松ケ崎地内の台地土塁あり。
	公園	瑞光寺公園		瑞光寺址の台地。
		博勝公園		大成沢にあり、鈴木勝日大総長の叙勲記念。
	年中行事	元朝詣り	1月1日丑寅の守本尊	
		七日堂裸詣り	1月7日	夜半一番鐘合図に裸の若衆がワニ口めがけてもみ合う奇祭。
		さいの神	1月15日	
		十三講	3月13日	12歳の若者が一生の開運出世を御守護。。
		花まつり	4月8日	釈迦誕生日、菊光堂に花御堂、甘茶。
		霊まつり	8月10日	祖先の霊をまつり大法要をする。花火をあげる。
		おこもり	9月30日	福満虚空蔵本堂で信者が一夜をあかす。
		桑おこもり	陰暦4月晦日の夜	養蚕の繁栄を祈願する。
	その他	柳津発電所	近代的発電所	
		滝谷川発電所	古い発電所	
		小巻山スキー場	みやげ品	
		桐下駄	〃	
		山菜加工品	〃	
		民芸品	〃	
		微細彫刻	〃	
		山菜料理	〃	
		うぐい最中	〃	
		あわまんじゅう	〃	
		聖牛最中	〃	

(二) 門前町としての柳津

宗教観光地として柳津を見るに何といっても大きな存在は円蔵寺である。古い歴史をもち、会津藩の庇護もあり、武士の信仰も厚く今日に至るまで繁栄を続けてきたところである。その虚空蔵尊は富と知恵の尊者として広い信仰圏をもっている。

文政十二年に現在の菊光堂が竣工したところであるが、その際の欅材の産出地（献納地）を調査して見るに、遠隔の地から、しかも山岳から巨材を運ぶ技術とその労力は想像以上のものがある。あえてこの難事業を完成させた原動力は何なのか、それは一念信仰に結びつく宗教心以外何ものもないであろう。

宗教観光地は具体的には、寺院とその門前町が特色である。虚空蔵さまの信仰者が、その霊験を求め、あるいはその霊験に感謝するために「寺」に集まることになる。それに加えて参拝者に対して信仰を強め、慰安、レクリエーションのもてなしをする諸施設が出来て特異な景観が見られるのである。そうした特殊な役割を果たす集落として門前町の発達が見られる。そこには六供の坊があって信仰の拠点となり街道筋にならぶ商店・みやげ物屋・飲食店・スナック・旅館・ホテル等が立ならぶ風景は只見川・釣橋・柳津大橋等の景観と調和して特異な門前町を形成したのが柳津である、すなわち柳津は一般的な門前町プラス風景、これが強身である。

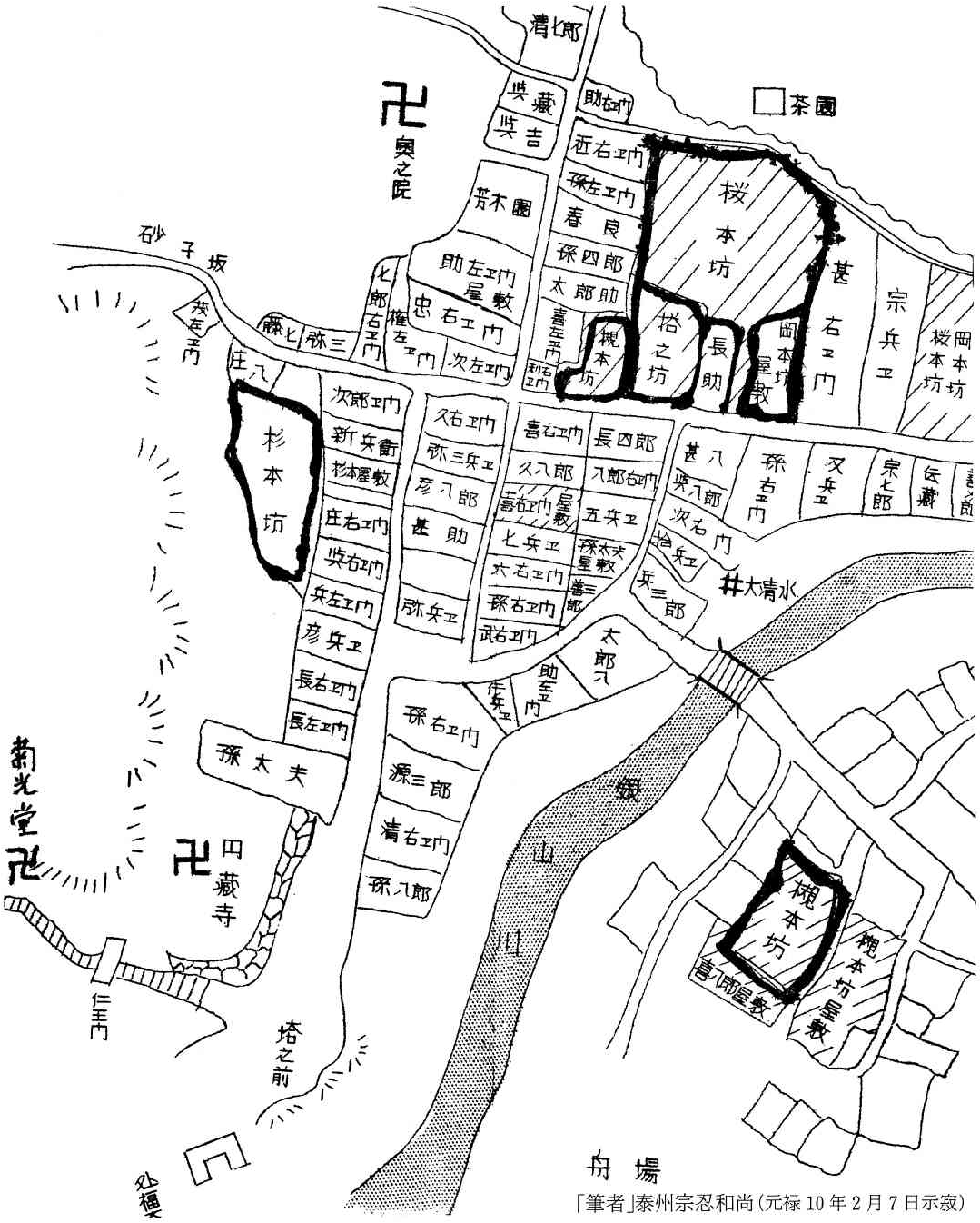


虚空蔵堂欅柱出材地分布図

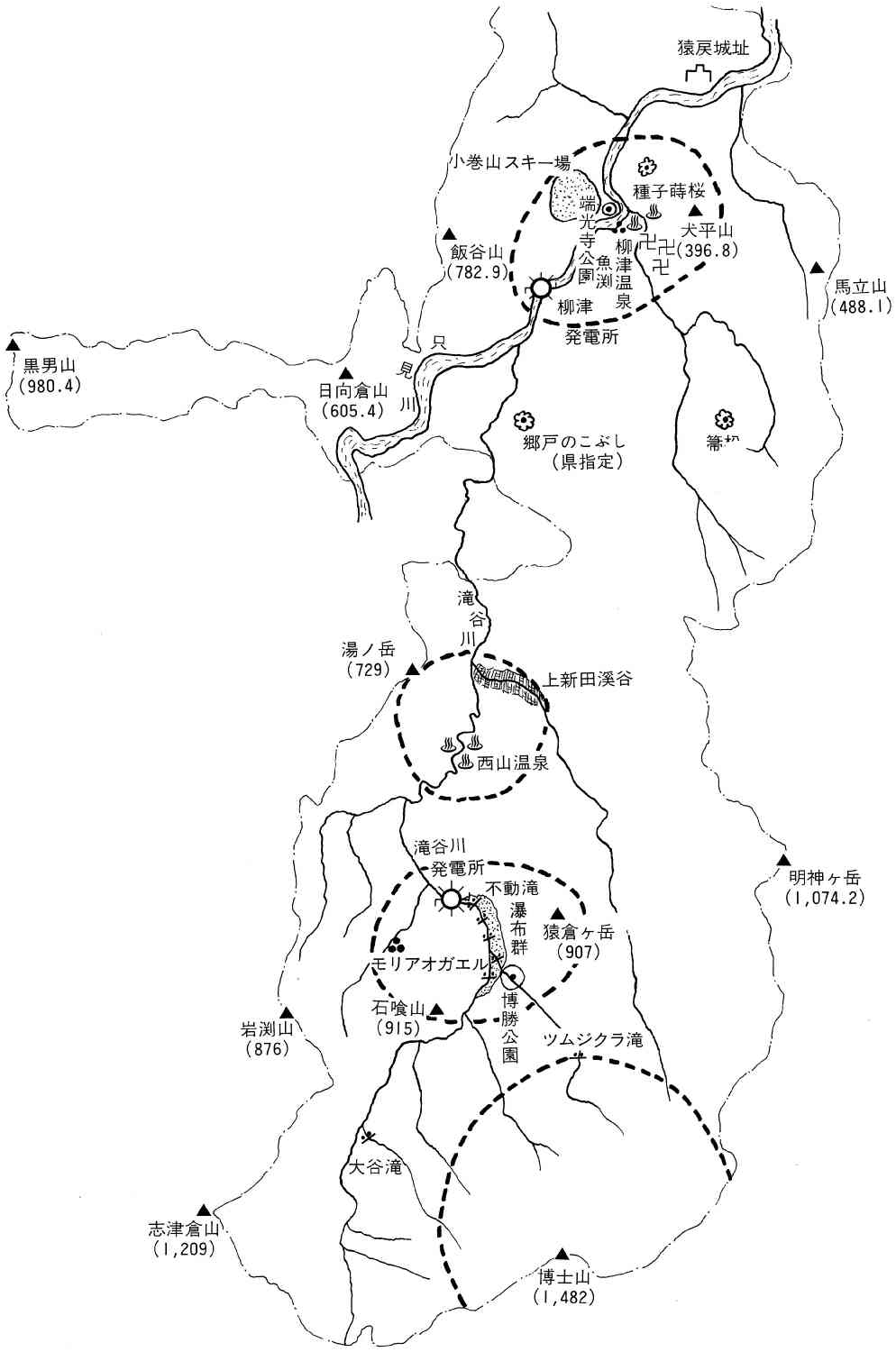
本来参拝することは純粋な「聖」なる信仰参拝であるが、参拝旅行は常住地を離れて旅をすることになるので、見聞を広め立派な建築物を研究し、あるいは食事・買物・宿泊などの諸施設を利用することになり所謂町全体が一つの観光資源である。すなわち聖と俗と併せ有するところに宗教的観光地としての機能がある。その意味において柳津本町地区の観光開発は重要な問題がある。

(三) 機能の複合化傾向

従来柳津は寺院から発生し、それに必要な諸施設ができた。所謂門前町としての機能を果して来た。それだけでは時代の変遷に対する適応が不整合になって来る。みやげ物の製造工場ができたり、山菜加工場といった製産機能や、スポーツに対する関心は、近来特にレクリエーション地においては温泉と共に必要不可欠の機能にして小巻山スキー場の開発などは、重要な問題である。更に文化財の保護と育成は、見る観光から知る観光への動きに対して見逃すことのできない条件である。


清七郎
奥之院
茶園
桜本坊
杉本坊
槻本坊
塔之坊
長助
砂子坂
円蔵寺
孫太夫
大清水
舟場
「筆者」泰州宗忍和尚（元禄10年2月7日示寂）

柳　津　古　図（円蔵寺所蔵）


猿戻城址
小巻山スキー場
種子蒔桜
端光寺公園
柳津魚渕温泉
犬平山
(396.8)
飯谷山
(782.9)
馬立山
(488.1)
柳津
発電所
只見川
黒男山
(980.4)
日向倉山
(605.4)
郷戸のこぶし
(県指定)
滝谷川
湯ノ岳
(729)
上新田渓谷
西山温泉
滝谷川
発電所
不動滝
瀑布群
猿倉ヶ岳
(907)
明神ヶ岳
(1,074.2)
モリアオガエル
石喰山
(915)
博勝公園
ツムジクラ滝
岩渕山
(876)
大谷滝
志津倉山
(1,209)
博士山
(1,482)

観光資源分布図

五、今後の課題

昭和五十年五月、『福島県・柳津町観光開発基本計画書』調査担当者、日本観光協会専門委員、立教大学教授小内達男外四名による、柳津町における観光開発の課題を下記の様に述べている。・

『福島県・柳津町観光開発基本計画書』（十六頁より抜萃）

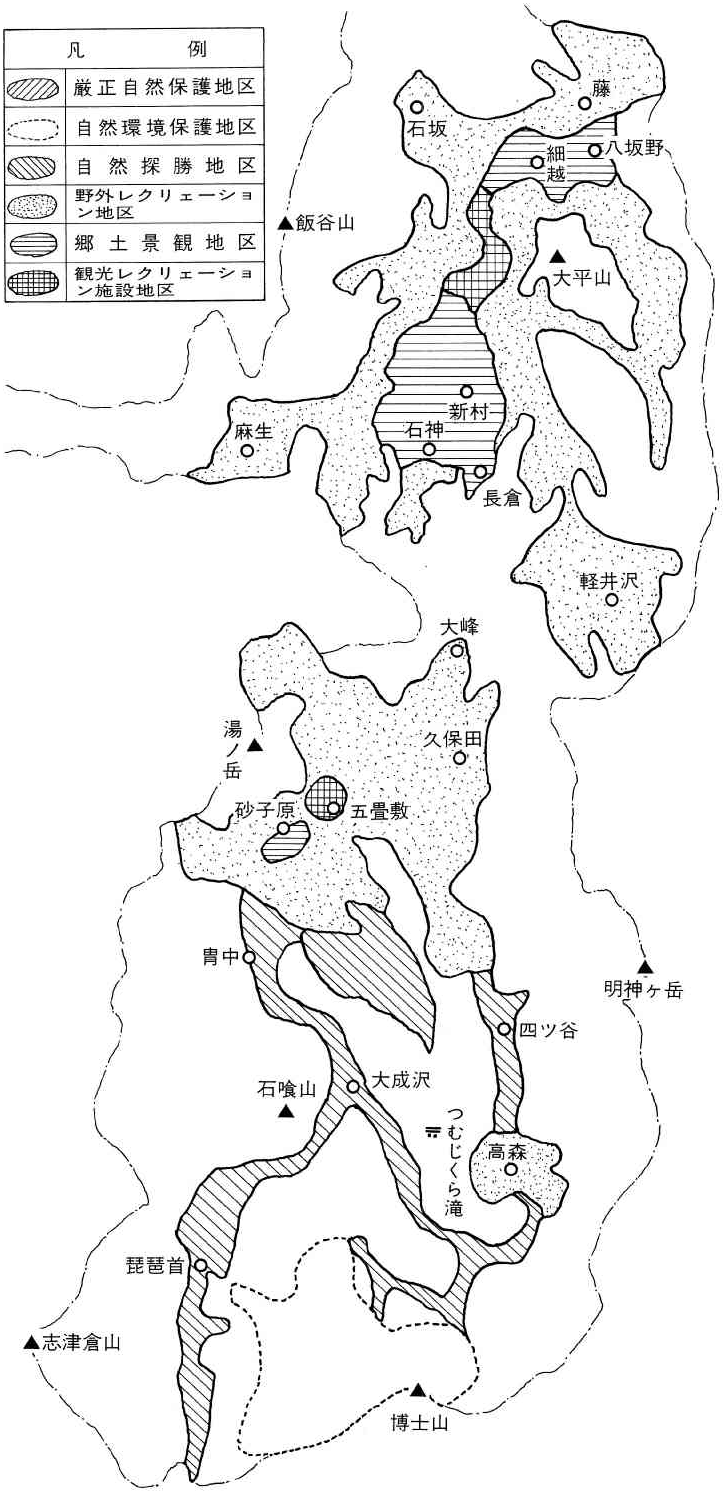
観光レクリエーション土地利用計画（観光開発基本計画書による）

土地利用及び管理計画区分	観光レクリエーション土地利用区分	土地利用の方針
厳正自然保護地区	厳正自然保護地区	自然保護を最優先とすることから、観光レクリエーション利用は原則として、無車道地域とし、登山等歩道による利用に限定する。
自然環境保護地区	自然環境保護地区	観光レクリエーション利用には適合しにくいため、観光レクリエーション利用の背景地として、積極的利用は考えない。
	自然探勝地区	自然環境に依存したレクリエーション利用が可能なところで、自然環境保護に重きを置きつつ、小規模なレクリエーション利用を推進する。
自然環境開発地区	野外レクリエーション地区	自然環境を著しく改変しない範囲内で、自然資源を利用した各種の野外レクリエーション利用を促進する。
生活環境地区	観光レクリエーション施設地区	観光レクリエーション利用の効率をはかるため、各種の施設整備の密度を高め、各種の利用が集中的に行われる地域。
	郷土景観地区	歴史的・風土的資源の特色を生かし、文化財や民俗資料などの保存をはかりつつ、これらの観光レクリエーション利用を推進する。

柳津温泉は虚空蔵尊を中心にして発展してきた。あるいは柳津地区が虚空蔵尊によって発展してきた、というほうが正確であろう。柳津温泉をこのような、いわば門前町としてみるならば、現在の利用状況は良くその姿を現わしているといえよう。しかしながら河川改修工事がなければ、土産品店や旅館への改築投資がなされなかった事実からも窺えるように、宗教的観光のみでは諸施設への投資が不可能な状態にあった。前近代的な老朽化した旅館諸施設が一般参観者はもとより、参拝者からも敬遠されつつあったとみてよいであろうが、同時に旅館諸施設の改良ですべてが解決されるとはいい難い。新改築旅館では以前よりも利用がよいといわれるが、旅館経営の安定的発展を期するにはかなり高い稼動率を持続する必要があることはいうまでもないし、さらに老朽化した旅館の改築を促すには一層多くの宿泊者を得なければならない。その点から見ると八十五パーセントを占める日帰り観光者を持つことは、それだけ観光誘引力（観光魅力）をもっていることの証拠でもあり、また同時に宿泊者が十八・五パーセントでしかないことは、宿泊地としての魅力に乏しいことの現れだということもできる。なお日帰り観光者の多い理由に宗教上の行祭事があげられるが、柳津地区の問題は、主として宿泊観光地としての魅力を如何に造成するかにあるといえよう。冬季間のオフ対策ももとより必要であるが、観光者の滞留時間を延長することが最大の課題であり、本地区の観光レクリエーション地としての総合的な環境整備がその主

題となるであろう。次に西山温泉については、総じて自炊湯治場が基調とされているが、近年一般保養者の需要も増えつつあるという。温泉地内の現状からすれば、湯治場にしろ、一般保養地にしろ施設の老朽化が目立ち、いずれの方向をもって運営するにしても根本的な改築が必要な段階にきている。本地区に対する提案は後章に述べるが、豊富な温泉を最大限に利用するためには、基本的な問題としても道路交通の改良と計画的開発整備の必要性が指摘される。

また、その他の地区については、博士山をはじめとした山岳・丘陵地の観光・レクリエーション利用や、観光農村漁業の導入など、未利用資源の積極的な開発利用が検討されてよい。



観光土地利用計画図（柳津町観光開発基本計画書）